

Stage Thirteen

「暗黒のゴルフ」

「人間たちよ、聖なる父の御名において命じます。

地上にて行方不明になった天使長ユーシスを探し出し、暗黒のガルフを打ち倒しなさい！」

「天使長？ そんなものが私たちと何の関係がある？」

高飛車な天使の物言いにグランディーナがいつもの調子で返した。しかし薄紫色の衣をまとったスローンズは、その人間離れした美貌にそぐわない威圧感さえ漂わせて、さらに高圧的な口調になった。

「あなたたち人間の戦いに巻き込まれて前の天使長ミザールは墮天したのですよ。聞けば地上の戦いはゼテギネア帝国と解放軍とやらが相争っているとか。ならばミザールの墮天した原因も、姉を追って地上に降りたユーシスが行方不明になったことも、あなたたち人間に責任の一端はありましよう」

「私たちの戦いと天使長の墮天には何の関係もない。ミザールが墮天したこともユーシスが行方不明になっ

たことも初めて聞いた」

そこへ天空の三騎士たちが走ってきた。ここ天空の島で天使を見るのはこれが二度目だ。三人の急ぎ方からランスロットは、天使が現れるのは天空の島にあつてもただならぬ事態なのだろうと推測した。

三人の天使のうち、後ろに控えた二人のエンジェルも天空の三騎士を認めて多少なりとも安堵したように見えるが、スローンズはそれほどでもなかった。

三人に話しかけたのは竜牙のフォーゲルだ。

「事情をお話してください、天使殿。天界でただならぬことが起こっているのですか？」

それでスローンズも話し相手を三騎士に変えたようだ。グランディーナとランスロットのことは高みから見下すだけだったのに、三騎士相手となると地上近くまで下りてきて、まず一礼さえしたほどだ。その姿はあくまで優美であった。

「天使長ミザールが墮天しました。後を継いで天使長となったユーシスはミザールの妹ですが、ファイラーハさまの許しもなく姉を追ひ、地上に降りて行方不明になつてしまいました」

「ミザール殿ほどの方がなぜ墮天したのです？」
フォーゲルの声音に驚きが混じったように、スルス

トやフェンリルも顔色を変える。

「ミザールは聖なる父に仕えし身でありながら、人間の男に懸想しました。そのような天使は何もミザールが初めてではありませんでしたが、あろうことかミザールはその男にそのかされて、天界に封印されていた魔石キヤターズアイを持ち出したのです」

「キヤターズアイ！」

三人は絶句したが、グランディーナが口を挟んだ。

「ならば、ミザールの相手の男とはラシュデイというのだろうか？」

スローンズは彼女を睨みつけたが、フォーゲルに話そう促されて、渋々といった表情で応答した。

「ミザールの相手を知っているとは、あなたたちにも責任があると認めたも同然ではありませんか。ですが、いまは天使長ユーシスの搜索と、暗黒のガルフを倒すことが最優先だというのがファイラーハさまの命です。ミザールを誑かした男には、いずれ天罰が降りましょう」

「グランディーナさん、あなたが言っていたのはこのことだったのですか？ ラシュデイはまんまとキヤターズアイをせしめました。それも気高き天使長さんを誑かす極悪なやり方ですネ」

「奴ならば利用できるものは何でも利用するだろう。まさか私も、天使長が奴に懸想するとは思わなかったがな」

「しかし、天使長が不在では天界もさうとう混乱しているはずですよ。まずはファイラーハの仰るとおりユーシス殿を見つけて天界に戻っていただかなければなりません」

「それだけではないのです、天空の三騎士殿。ミザールは天使長だった時にラシュデイに祝福を与え、契約まで交わしてしまいました。ミザールの名においてラシュデイが私たちを召喚すると、私たちは地上に降りなければならなくなるのです。それも人間たちの争いなど荷担させられるためです。ファイラーハさまがミザールを墮天させたのは、その契約を無効にするためでもありました。すでに多くの天使が墮天してしまいました。私たち天使が人間の戦いに協力させられなければならないとは、屈辱も甚だしいことではありませんか」

「それでは暗黒のガルフを倒せとは、どのようなことですか？ 奴は我々がアンタンジルの地に封印しました。まさか、その封印が解けガルフが逃げ出したのでしょうか？」

「いいえ。そのようなことになればガルフはまたた
くさんの悪魔を連れて地上に攻め入ってくるでしょう
が事態はそこまで悪くなっていません。ですが、ここ
二四年ばかり人間たちが封印の儀式を怠ったため、い
まやアンタンジルへの侵入は容易となり逆に脱出して
くる悪魔もいるほです。このままではガルフの封印
が解けるのも時間の問題でしょう。このことにおいて
も人間たちの責任は明白ではありませんか」

スローンズはそう言うのと改めてグランディーナを睨
みつけた。

「ユーシス殿を捜すのを手伝ってもらえますね？

私たちだけでは地上を自由に動くことはできません。
ブリュンヒルドのことも含めて、あなたたちの協力が
必要です」

フェンリルが懇願すると、フォーゲルとスルストも
頷いてみせた。

グランディーナはあまり気の進まなさそうな顔をし
ていたが天空の三騎士や天使たちをそれほど待たせる
こともしなかった。

「わかった。私たちはムスペルムに戻り、そこから
ガルビア半島に行く。それから天使長を探しに行こう。
あなたたちもともに来るのか？」

「当たり前です。私たちはあなたたちが天使長ユー
シスを探し出し、暗黒のガルフを討つたという知らせ
をファイラーハさまに持ち帰らねばなりません」

「なるほど。だが天使長を探せと言われても、どこ
で行方不明になったのか教えてくれ。一人の天使を探
すには地上は広すぎる」

「ユーシスは地上でアンタリア大地と呼ばれている
ところで所在が不明になりました」

「それは都合がいい。アンタンジルに行くには、ア
ンタリア大地のカオスゲートを開くしかない」

「ミザールもそこにいるのか？」

「いいえ。ミザールはバルハラに行きました」

「バルハラか」

言ってからグランディーナは考え込むように沈黙し
たが、じきに顔を上げた。

「フォーゲル、ワイバーンの準備はできているの
か？」

「いつでもカオスゲートに行けよう」

「サラディンやアイーシャと合流して、ムスペルム
に戻ろう」

それから、一同は五頭のワイバーンに分乗してシグ

ルドのカオスゲートに向かい、そこからムスペルムに戻った。

三つの天空の島のカオスゲートは天空の三騎士の剣によって開かれるようになっていて、それぞれの島で三人ずつの騎士団員が交替で詰めるようになったということだ。

そして、ムスペルムに残った解放軍は最初にこの天空の島に現れた時のカオスゲートの近くで野営していたが、そこに近づくグランディーナたちを真っ先に見つけたのはカノープスであった。

「よお！ 元氣そうだな！」

彼はエレボスに乗って駆けつけ、まずランスロットに近づいた。

「君こそ変わりなくて何よりだ。こちらの様子はどうだ？」

「変わりねえ！ ファーレンがよく来るぐらいで帝國軍もいねえし、みんな元氣だぜ！」

そこにグランディーナがワイバーンを接近させる。

「これからの予定が変わった。話をしたいから皆を集めておいてくれ」

「承知！」

天空の三騎士たちは、それぞれ一人ずつ天使を同乗

させている。シャングリラに行った時は真っ先に襲われた相手だ。彼女らを見ても何かただならぬことがあったのは想像できたのだろう。カノープスは即座にエレボスを反転させると野営地に戻っていった。

ワイバーンがいくら頑張ってもグリフォンの翼には及ばない。巨大な蝙蝠こうもりのようなその羽根は、ゆつくりと羽ばたくのには向いていても速度は出せないからだ。五頭は野営地を目指し、グランディーナを先頭に次々と着地していった。

その時にはムスペルム騎士団長ファーレンⅡホルンスヘルンも交えて解放軍も待機しており、皆は天空の三騎士に天使まで同行しているのを物珍しそうにも警戒してそうにも眺めた。

サラディン、ランスロット、アイーシャが皆に合流する。半月ぶりの再会だが、あまり懐かしんでいる場合ではなさそうなことは誰もがわかつていた。

「半月もの待機、ご苦労だった。私たちはこれからガルビア半島に戻りアンタリア大地に向かう。そこで行方不明になったという天使長ユーシスを助けるためだ。アラムートの城塞への帰還は遅れる」

「なぜ、我々が天使長殿の捜索をしなければなりませんかな？」

ケビンⅡワールドの発言は皆の気持ちを代弁するものだ。しかしグランディーナの答えは淡々としていた。

「アンタリア大地で二四年前まで封印の儀式が行われていたことは、あなたたちのなかにも聞いた者もいよう。だが、ホーライ王国が滅亡して以来、儀式が行われなくなってしまう、封印の力が緩んでいる。アンタリア大地はアンタンジルという魔界に近いうところにつながっており、そこには天空の三騎士がオウガバトルの時に封じた暗黒のガルフという魔界の将軍がいる。アンタリア大地の封印の儀式は三騎士の行ったガルフの封印を助けるものだ。天空の三騎士の力を借りるにあたって、暗黒のガルフの復活は見過ごせないそうだからのために先にアンタリア大地に行かなければならない。天使長の搜索はそのついでだ」

もはやオウガバトルぐらいでは皆も驚かなくなりつつあったが、暗黒のガルフの名に息を呑む者は少なくなかった。

暗黒のガルフはオウガバトル伝説に最も長く登場する魔界の将軍で、一〇〇万匹の悪魔を率いて人間たちを襲ったとも伝えられる。その戦力は魔界から次々に現われる悪魔たちのためになかなか衰えることなく、天空の三騎士と十二使徒たちはガルフを封印するため

に死力を振り絞ったと言われていた。

「お待ちください。あなたは先ほど天使長の御名をユーシスさまと仰いましたが、ミザールさまの間違ひではありませんか？」

マチルダⅡエクスラインの疑問に司祭と僧侶たちが頷き合う。だがグランディーナは、これにも単なる連絡事項のように応じたただけだ。

「ミザールは墮天したからだ。ラシュデイに懸想し、魔石キヤターズアイを天界から盗み出した咎で天界を追われたそうだ。いまの天使長ユーシスはミザールの妹だ」

皆は驚き、その場はざわついたが、グランディーナはかまわずに話し続けた。

「三人の天使が私たちに同行する。天使長を助け、暗黒のガルフを倒すまでのお目付役だそうだ。それと天空の三騎士も合わせて紹介する」

彼女がその場を離れても、ざわつきはやまなかった。

「なあ、天空の三騎士つてのはあつちの三人のことなんだろう？ 一人、人外の奴がいねえか？ あれじゃ、まるでドラゴンだ」

「ああ、そうだ」

答えたランスロットは会ってからまだ四日しか経つ

ていないというのに、すでに自分がフォーゲルの竜頭に違和感を覚えていないことに気づいた。見慣れたわけではないのだが、初めからフォーゲルはあのような頭だったから、そういうものだと思えてしまったのだろうか。

しかし、皆の感想はカノープスの方に近いようだ。半神というよりも悪魔の方がまだ納得できるのかもしれない。それに、ほとんどの者はシャングリラで天使たちに襲われたことも忘れていない。彼女らに向けられるのも不信の眼差しの方が多かったが、その美貌は相変わらず高飛車で、こちらには視線ひとつ、よこさなかった。

「我々は天空の三騎士だ。縁あって、おぬしたちに助力することになった。地上に降りるのは数千年ぶりのことゆえ自由に動けぬが、よろしく頼む。彼らは赤炎のスルスト、氷のフェンリル、そしてわたしが竜牙のフォーゲルだ」

その言葉はよどみなく、ドラゴンの頭が発しているとは思われなかったほどだ。それにフォーゲルは解放軍のような反応には慣れているものとみえ、さらに三人の天使たちを指した。

「こちらの方たちはスローンズのエインセル殿、エ

ンジェルのレーシー殿とメリサンド殿だ。すでに話は聞いたと思うが、天使長ユース殿の搜索と暗黒のガルフ討伐まで同行される」

皆は神妙な顔で頷いたが、天使たちは彼らには無関心な顔をしていて、その鼻も終始、上を向いたままであつた。

「すぐに撤収できるか、ケビン？」

「全部、片づけるにはかかると思われます」

「この気候なら天幕を片づけても問題はあるまい。いまから撤収しておけ。明日はすぐにガルビア半島に戻り、ゾルムスタインからアンタリア大地に渡る」

「承知いたしました」

彼が改めて命じるまでもない。皆はグランディーナの言葉を聞いて、解散するとすぐに動き出していた。しかし、ムスペルムの常夏の気候に慣れた後では、たとえ通り過ぎるだけでも厳寒のガルビア半島に行くのはかなり面倒なことだった。

グランディーナがそのまま天空の三騎士たちと話を続けたので、ランスロットたちは皆の片づけを手伝った。そこへカノープスが素早く近づくと、

「竜牙のフォーゲルってことは、あの頭は自前なのか？ 兜じゃなくて？」

「そうだ。大昔、デイバインドラゴンを倒した時に呪いを受けて竜頭になってしまったとのことだ」

「デイバインドラゴン！ よく、そんなドラゴンを倒せるような奴を正気に戻せたな。さすがは半神つてところか。だけどグランディーナの傷は？」

「フェンリル殿はスルスト殿が正気に返すことができたが、フォーゲル殿との戦いでは、お二人の力だけでは足りず彼女も荷担せざるを得なかったんだ。その時に負ったものだ」

ランスロットが意識して皆から離れたので、二人の会話を耳を傾ける者はいなかった。

「あいつがフォーゲルとの戦いに荷担しただと？」

「そうだ。スコルハティとも戦ったんだ。不思議なことではないだろう？」

「それもそうだが、そいつはフォーゲルが強すぎたつてことだな。だけどスルストだつて、おまえとデボネアの二人がかりでもかなう相手じゃなかったじゃないか。それで、よくあんな傷で済んだもんだ」

そう言つてカノープスは一瞬、納得したような顔をしたが、また不審な眼差しをランスロットに向けた。

「俺はあいつとスコルハティの戦いを見ている。あいつが手を貸したつていうのはどの程度なんだ？ 天

空の騎士二人がかりでもかなわなかったフォーゲルにまさか一人で勝つたつてことか？」

「そうだ。だがスコルハティに押さえ込まれたように今回も彼女の力は暴走しかけた。それを抑えようとして自分でつけた傷がほとんどだ。君だから言うが、天空の三騎士殿と一緒に来られるのはわたしたちを助けるためじゃない。今度、彼女の力が暴走した時に速攻で天界に連れていくためだ」

カノープスは言葉を失つて息を呑んだ。しかしランスロットが一人で天幕をたたみ始めると、すかさず手を貸した。

「彼女も言っていたが、天使長の搜索はその話の後でつてきた、おまけのようなものだ。わたしたちには回り道になるが天界の三騎士殿の本当の目的を隠すためには都合が良かっただろうな」

「サラディンやアイーシャも知つてるのか？」

「知つている。サラディン殿はある程度ご存じだったようだ。ただ、わたしはアイーシャには聞かせるべきではなかったと思う。そうでなくても母上を殺された傷痕もまだ癒えていないように思える。いくらグランディーナが気を許しているとはいえアイーシャには辛い話だつたらう」

「俺はそうは思わねえけどな」

カノープスが先に立つて、二人は皆の方に戻り始めたが、そのなかにアイーシャを見つけ出すのはさほど難しいことではなかった。グランディーナのように特別、目立つわけでもないのに以前のように皆のなかに埋没してしまうことがなかったからだ。

「ガルビア半島の時も感心させられたが成長している。ミネアより、ずっと大人びて見えるぜ」

「大神官殿の娘だ。それだけでもいろいろと大変な立場だろうしな」

「そうは言うけど、おまえだっているいろいろあつたんじゃないのか？ そんなに楽なはずがなかったろう」

「わたしは最後まで彼女に従うと決めたからな。それにオルガナでもシグルドでもただ、ついていっただけだ。大変なことはなかったさ。それよりスラスト殿と戦って以来、剣を振るっていない。久しぶりに手合わせしてくれないか？」

「俺はかまわねえが、そんな暇があるのか？」

「暇は見つけてこそだ。わたしにはグランディーナのような力量も君のような長所もない。日々の修練を怠っているはずになまってしまいうからな」

「真面目だねえ」

そう言ったカノープスが急に不敵な笑みを浮かべた。

「よし、決めた！ 今晩は勝ち抜き戦やるぞ！ おまえら、腕を磨いておけよ！」

「ええーっ?!」

その夜、さんざん汗をかいたカノープスが一人で草原に寝転んでいると、グランディーナとアラデイが近づいてきた。

「俺はそろそろ寝る時間だぜ」

「明日の話だ。あなたとユーリアはアラデイたちと一緒にアンタリア大地へ先行してくれ」

「あの吹雪のなか、グリフォンを飛ばせていうのか？ 何だつて、そんなに急ぐ必要があるんだよ？」

「私たちはこれからガルビア半島を南下してゾルムスタインへ向かう。アンタリア大地へはそこから船で三日、どんなに急いでもここから七日はかかる。だがグリフォンなら吹雪のなかを無理させても、その半分で着けるだろう。そのあいだにアンタリア大地の様子を探っておいてほしい」

「俺もユーリアもアンタリア大地なんか行ったこともねえぜ。それともアラデイに案内できるのか？」

端正な顔立ちの若者は黙って頷いた。

「彼に地理の説明はした。ガルビア半島を離れるまではグリフォンも手こずるだろうが雪がなくなれば速いはずだ。アンタリア大地に着いたらアラデイの指示で一带の調査をしてくれ。アンタリア大地にはゼテギネアで最大のダイイクンデー湿原がある。グリフォンで飛び回った方が効率がいいし、あなたたちの目はアラデイたちの助けとなるだろう」

「わかったよ。ユーリアに話したのはのか?」

「ギルバルドと明日の支度をしてもらっている。カオスゲートを抜けたら、すぐに発つてくれ」

「だけど今回はカリナもいねえし俺たちが行くとグリフォンも有翼人も残らねえぜ。大丈夫なのか?」

「ガルビア半島を移動中はプロミオスを先頭にする。その先は船だから、それほど心配していない。それよりもダイイクンデー湿原の方が厄介だ。先に行つてくれ」

「しよすがねえなあ」

翌閏竜の月十四日、カノープスを乗せたエレボスを先頭に、五頭のグリフォンが次々に飛び立っていった。カオスゲートの周辺には相変わらず猛烈な吹雪が荒れ狂っている。それはガルビア半島のどこよりも強い

もので、ランシュデイの仕掛けた罠がまだ働いていることの証明でもあった。

「私たちはこのままガルビア半島を南下する。行くぞ!」

フレアブラスとライアンを先頭に、解放軍も移動を開始した。

解放軍の一行は、天空の三騎士も天使たちも、食事もせず睡眠を取る必要もないと知らされて、かなり驚かされた。

天空の三騎士とも異なるのは天使たちが暑さや寒さもまったく気にしていないことだ。確かにその肉体はただの器なのだ。そのせいか、彼女らは三人とも光り輝くような美貌の持ち主であったが、その美しさは人のものとはまるで違い、無機質なものとしか感じられなかった。いくら着飾らせても人形や彫像には惚れなようなものだ。

それに三人の天使のなかで一人だけ話しているエンセルの口調が人間を完全に見下しているのも、天使への淡い憧れを打ち砕くには十分なほどだった。

自分たちと同じように見えるが、特に天使の場合は形だけの肉体であり、それは地上に降りるために必要

な「物」なのだと言う。身体など天界では無用の長物だとも言われるに至っては、まったく異なる存在だと思わないわけにはいかなかった。

しかし一度、その身体を得て地上に降りた天使たちは今度はその身に捕われてしまう。自由に空を飛ぶことはできるものの肉体という枷から逃れることはできない。肉体が囚われの身になってしまうと人間同様、逃げ出すことは容易ではなく、その身の及ぶ限りのことしかできなくなるのであった。

地上に降りたきりアンタリア大地で行方不明になった天使長ユーシスもまた、囚われの身となったものと天使たちは考えていた。

「もしも肉体が破壊された場合はどうなるんだ？」
グランディーナの問いにエインセルは不快そうな顔を隠さなかった。

「私たちは死にません。肉体が破壊されても私たちはまた天界に蘇るだけです。そんなことがユーシスを捜すのに何の関わりがあるのでしょうか？」

「万が一、ユーシスを人質にとられても、その身が氣遣わないで済む。あなたの言い方では蘇るのにそれほど支障も来さ^{きた}ないようだから」

「何て野蛮な考え方なのですか！ 天使長を見殺し

にするなど、解放軍とやらも帝国軍と変わらぬ野蛮人のようですね。そんなことをすると、あなたたちには天罰が下りますよ」

「死んでも蘇る天使と、死んだらそれきりの私たちとでは死の重さが違う。天罰など下したければ下すがいい。ユーシスを見殺しにして解放軍から犠牲者を出さないで済むのなら私の腹は決まっている」

エインセルは十字架をグランディーナに向けたが、素早くフォーゲルに制せられた。そこで彼女の怒りの矛先は、今度は天空の三騎士たちに向けられた。

「フォーゲル殿！ なぜ、あなたが指揮を執らないのですか？ 半神ともあろう方々が、たかが人間の言いなりになっていてよろしいのですか？」

「先日、申し上げたとおり、我らが地上に降りるのはオウガバトル以来のことです。地上の風景は様変わりし、我らの知らぬ国ばかりとなりました。人の姿も生業も変わっております。知らぬままでは具合の悪いこともありましょう。天空の三騎士とはいえ我が物顔で地上を歩くのは気が引けるのです。それにゼテギネア帝国との戦いはあくまでも解放軍のものです。我らが下手に指揮を執っては、勝てる戦を落としてしまいかもれません」

フォーゲルの返答にますます不機嫌になった天使の肩をスラストが素早くつかむ。

「それでスヨ、エインセルさん。最初から張り切つても疲れてしまうだけでスネ。それに暗黒のガルフのことも気にかかりマス。もとはといえば、わたしたちが奴を封じるしかできなかったのも悪いノデス。奴も死んでしまうわけではありませんが、二度と天界や地上に手を出したくないと思わせるぐらい、こつびどい目に遭わせてやらないといけませんネ」

「疲れない御身とはいえ、慣れない地上では氣詰まりもいたしましょう。どうぞ、皆様、こちらでお休みください」

フェンリルの差し出した手にスローンズは己の手を重ねた。天空の三騎士の気配りに表情は少しだけ和らいでいたが、グランディーナに向けられた眼差しは氷のように冷たかった。

「あなたには天空の三騎士殿の御心があつての地位だということを忘れないでもらいたいのですね」

しかし彼女は返事もしなかった。

「バルハラとガルビア半島の凍土の下には、我らの同胞が眠っている。その亡骸が掘り返され、弔われる

日が来ることもあるのだろうか？」

かつてホーライ王国騎士団の従騎士としてバルハラでの戦いに参加したケビンは、変わらぬ光景に、そうつぶやいた。

「フレアブラスの灼熱の息をもつてしても、この根雪を溶かしきることはできないだろう。放つておくだけで水も氷になるような所だ。ならばバルハラもガルビア半島も、このまま弔いの場としてしまった方が合理的だと思うが、それではそなたたちの気は済まぬだろうな」

サラディンが応じるとケビンは考え込むような顔をした。冷たい風が、そんな会話さえ奪い去っていく。それが止む日が来るのかも誰も知らないことなのだ。

「そうでもありませんまい。バルハラの戦いを話でしか聞いたことのない者の方が多くなってきました。ならば何があつたのか知らせる手段をこれから考えていかなければならないと思います。それにはバルハラやガルビア半島はもつてこいの地です。何より、いまのままではバルハラもガルビア半島も厳寒の地と敬遠され、いずれ廃れてしまうでしょう。それよりも弔いの地ということ人で人びとが集まるようになれば、倒れた者たちの魂も慰められるのではないのでしょうか？」

「ならば、そなたが始めればよい。そうすれば志を同じくする者が集まってくる。それは力となつて、周りの者を動かすだろう」

「そうですな。それが亡き同胞へのいちばんの弔いとなつてくれるかもしれませぬ。この戦いが終わる前に、ひとつ考え始めてみるとしましょう」

ゾルムスタインを離れた時、ようやく厳しい寒さから解放軍は自由になった。季節はとつと夏になつていたので。

閻竜の月二二日、解放軍はアンタリア大地のバーミヤンに到着した。船を下りた途端に町の方から蒸し蒸しした風が吹きつけてきた。

ランスロットは鎧の下をすぐに汗が流れるのを感じて、この暑さがアンタリア大地全体なのか、バーミヤンに特有のものか気になつた。

皆もいままで通つてきたゼテギネアのほかの地では感じたことのない蒸し暑さに、嫌そうな顔をしていたり、興味深そうな顔だつたりと様々な反応だ。

だが、その蒸し暑さを憂う間はなかつた。バーミヤンの港で一行を待ちかまえていたカノープスにより、恐るべき事態が知らされたからだ。

「アンデッドの群れが夜になると湿原の方からやつてきやがるんだ。ケルーマンはもつとひどい。町の街壁だけじゃ守りきれねえ」

「いつからそんなことになつた？」

「俺たちがアンタリア大地に着いた時にはもう、そうなつていた。聞いた話じゃ前から湿原にアンデッドが出ることはあつたらしいんだが、ここ数年、その数が増えてきたつてことだ。何でも南のカンダハルにオミクロンつて奴が住み着いてかららしい。それがここ一ヶ月のあいだに急に増えたそうだ」

「オミクロンですと！」

ケビンが勢いよく立ち上がったので、カノープスも皆も思わず彼を見た。

「話の途中で失礼いたす。だが、オミクロンこそ、我がホーライ王国の裏切り者、神官長という位にありながら死霊術に手を染めたばかりか、ラシユディにまで売り渡した罪は重罪なり！ ぜび先陣をお任せあれ、オミクロンめを我が槍の鏑としてくれよう！」

「その話は後でしょう」

グランディーナの言葉にケビンは頷き、座り直した。その顔を盗み見る同じ小隊の者たちは不安そうな表情を隠しもしない。

「続けてくれ、カノープス」

「町の守りはロシユフォル教会の司祭や僧侶たちが中心にやっているが、なにしろ戦力が足りねえ。スケルトンなら門を閉めれば終わりだが、亡霊や悪霊となると町の中まで入ってこられるからな。それにバーミヤンではそこまで酷くないんだが、ケルーマンではスケルトンが街壁をたたく音がうるさくて夜も眠れないって話だ。しょうがないからアラデイとユーリアを偵察に行かせて俺たちはケルーマンで町の防衛を手伝っていたんだが、確かにあれは神経に障る音だ。スケルトンってのは鳴かないが骨を鳴らしやがる。そいつがかたかたかたかたつて、夜通し聞こえてくる。街壁に近い奴はずつと壁をたたき続けているし、遠い奴らは骨を鳴らしているし、さすがの俺たちも神経がすり減つたぜ。町に侵入してくる亡霊は大した数じゃないが、あいつらには武器も効かないから司祭たちを守ってやるぐらいが仕事で、いちばん大変なのは、あの音だろうな。だけどアラデイたちが戻ってきたからおまえたちと合流しようと思つてバーミヤンから戻ってきたところだったのさ」

「アラデイ、カンダハルの様子はどうかだったのか話してくれ」

「カンダハルは夜です。闇がカンダハル中を覆つていて、明けることはありません。町のなかはアンデッドであふれかえり、明るくなることもないので活発に動き回っています。カンダハルを離れるとふつうに時間を経つので、アンデッドたちはカンダハルの外が夜になるのを待つて、こちらに向かつてくるのです。カンダハルの中央に神殿があり、アンデッドはそこから出てくるようですが、このような事情のためにこれ以上、確かめることができませんでした。アンデッドたちは命令を受けているのかもしれませんが、その動きはでたらめで統率がとれているとは言いかねます。ですがアンデッドの行く先は大半がダーイクンデイー湿原です。あそこには底なし沼などもあつて地理に不案内な者が歩くのは容易ではありませんが、アンデッドたちは沼にはまった別の屍を乗り越えるようにしてケルーマンやバーミヤンにやつてきています」

アラデイの報告に皆が息を呑む。アンデッドの跋扈はつこする町は想像するだに恐ろしく身の毛のよだつような話であつた。オミクロンの名を聞いていきり立つていたケビンでさえ、己の恐れを恥じるように石突きを地面に打ちつけた。

皆の反応など気にも止めない風にグランデイーナが

口を開く。

「サラディン、四六時中、夜にするような物に心当たりはあるか？」

「おそらく〈闇の香り〉を使っているのだろう。あれは一つの町ぐらいの局地的な範囲にしか効果がない。その入手先もラシュディン殿からであろう」

「〈闇の香り〉の効果絶つことはできないのか？」
「光のささやき〉を使うことだが、持ち合わせはないし、通常、手に入る物でもない」

「ジャックに訊いてみるか。たとえあつたとしても数はなさそうだがな」

「待つてくれ。いかな死霊術師といえど無限にアンデッドを生み出すことはできない、オミクロン殿の力が源なのだ？」

「グランディーナが肩をすくめてみせたのでアラディンが答えた。」

「カンダハルへの侵入がかなわなかったの、そこまでは調べられませんでした。ただ、ケルーマンで聞き込んだところではアンデッドが町まで来るようになったのは、ここ一ヶ月ばかりのことだそうです」

「アラディンの言葉にサラディンは少し考え込んでから天使に話を向けた。」

「エインセル殿、ユーシス殿が行方を絶つてから、どれぐらいになるのですか？」

「地上の時間で二ヶ月足らずでしょう」

「つじつまは合うな」

サラディンの言葉に、ほかの者は不思議そうな顔だがある。その逆もまた可能なかもしれない。天使と我らの魔力が同じものなのかはわからぬが可能性は否定してかかれまいだろう」

「つまり、どうということなのです？ オミクロンという人間がアンデッドを生み出していることとユーシスが行方を絶つたことと、どう関係があるのです？」

「エインセルが苛立ちを隠してもせずに訊ねた。」

「ユーシス殿の魔力がアンデッドを生み出すために使われているかもしれない、ということですよ」

「何ですって?! 天使長の力が、よりによって、そのようなおぞましいことに」

絶句して、ふらついた彼女をスルストが支える。

「あくまで、そういう可能性があると言っているに過ぎません。事実はカンダハルに行かねば確かめられないでしょう。カンダハルにオミクロン殿に協力する魔法使いがいるかもしれませんし」

「それが事実なら天使長にあるまじきことです！」

私たちの力はファイラーハさまにいただいたもの、それを正しいことに使わなかったばかりか、アンデッドのような不浄の者を生み出すなんて！ おぞましい、なぜファイラーハさまはユーシスも墮天させてしまわないのでしょうか？」

「エインセルさん、あなたがそんなに動揺しては、レーシーさんとメリサンドさんまで不安になつてしまひマスネ。それにユーシスさんも悪気があつてしたことではないはずデス。墮天させろなんて物騒な話はおしまいにしましヨウ。ユーシスさんはグランディーナさんたちが助けてくれマス。あなたたちはもう休みましヨウ、ネ？」

エインセルは疑わしそうな眼差しをグランディーナに向けたが、スルストに逆らうこともしなかった。もつとも休むといつても野営地が設置されているわけではないので、皆より外れたところに行つただけだ。

スルストと天使たちがいなくなるのも待たずにグランディーナは話を再開した。

「アンデッドを絶つには、その源であるオミクロンを倒さねばならない。今回はケルーマンとバーミヤンの守り、それにオミクロンを倒しに行く者と三手に分

ける。

カノープス、あなたはそのままバーミヤンの守りにつけ。ほかにガーディナー、ロベールの小隊がともに残る。

ギルバルド、デボネア、ラウニイー、ライアン、バインズの小隊は明日の朝、ケルーマンに向かい、ロシユフォル教会の司祭たちに協力して町を守れ。

アラディたちもケルーマンに行け。

私とサラディン、ランスロット、アイーシャ、ケビン、それにマチルダの小隊はグリフォンに分乗してカングハルに向かい、オミクロンを討つ」

「どうして俺がバーミヤンに残らなくちゃいけないんだよ？ 置いていくならメンドーサだつてドレファスだつていいだろうが？」

なっ？ おまえら、どっちか、替わってくれよ」

「あなたはケルーマンで町の防衛をしていたのだから、少し休め」

「だからつて、また留守番つて話はねえだろう。

おい、どっちが替わってくれるんだ？」

名指しされたメンドーサハリスとドレファスウエーバーはカノープスの申し出に顔を見合わせていたが、大して相談することもなくドレファスの方が手

を挙げた。

「それでは、わたしと交代しましょう」

「決まりだな」

「わたしもカンダハル行きに同行させてもらおう」

いままで黙っていたフォーゲルが口を開いたので、皆は彼を注視した。天空の三騎士はほとんど天使たちと一緒だったので彼の竜頭には見慣れないと感じる者が少なくなかった。

「ユーシス殿の安全を確認するために我らのうち一人は同行すべきだ。それに南西の島にカオスゲートがあるから案内しておこう。かまわぬだろうな？」

「カオスゲートのことはありがたい。ならば、あなたには私とエレボスに乗ってもらおう。

フェンリルたちはバーミヤンで待っていてくれ」

「その方が良いでしょうね。いくらファイラーハの命とはいえ、天使の方たちはあまり地上を歩きたがらないでしょう。」

フォーゲル、ユーシス殿のことをお願いしますね」

「うむ。サラディンの言ったとおりのことになっていたら、たとえユーシス殿の咎ではないとはいえ天使には酷なことだ。一刻も早くユーシス殿を解放しなければな」

「ならば、マチルダ、あなたの小隊がケルーマンに行ってくれ。カンダハルには私とサラディン、ランスロット、カノープス、アイーシャ、フォーゲル、それにケピンの小隊で行こう。」

ブリッド、あなたはケルーマンに行け」

「わかりました」

ブリッドが頷いた。

「ガーディナー、あなたがバーミヤンに残って、指揮を執ってくれ」

「承知しました」

「発つ前にこのロシユフォル教会に行こう。」

バーンズ、ロベール、あなたたちも一緒に来てくれ」

「はい」

そこでグランディーナが促したので、ガーディナー、フルプフ、バーンズ、タウンゼント、ロベール、クリスタロスが立った。

「カンダハルにはいつ発つのだ？」

「ロシユフォル教会から戻ってきてから行こう。グリフォンなら今日のうちに西の島に着けると思う。」

ユーリア、支度を手伝ってくれ」

「わかったわ」

「西の島に何かあるのか？」

「このまま南下してケルーマンに行っても、その先のグライクンデー湿原で休むこともできないし、いくらグリフォンでも一日で越えられるところでもない。アンデッドが湿原にいるから、それを避けて西の海づたいにカンダハルに向かう」

特に何も言われていないが、ギルバルド、デボネア、ラウニイー、ライアン、マチルダも明日の朝には発てるよう、準備を整えにかかったし、ユーリアが手伝ってサラディンたちも支度を始めた。

バーミヤンの町にロシユフォル教会は一ヶ所しかなく、建物も小さかった。そこにいる司祭は一人きりで、ほかに僧侶が二人いるだけだ。グランディーナたちが商店に寄ってからロシユフォル教会を訪れた時、出迎えたのは司祭のディオヌークーパーという女性だったが、顔には心労がにじんでいた。

「疲れているところをすまない。私たちはゼテギネア帝国と戦う解放軍の者だ」

「それはわざわざお越しいただきまして、ありがとうございます。あなたの方のことは大神官のフォーリスさまから、お手伝いするよう言われておりますわ。ですが、すでにお耳に入っただけです。私も少しは

んけれど、いまのアンタリア大地ではアンデッドが大量に発生してしまつて、私たちはそちらに手を取られ、思うように動けません。このバーミヤンはアンデッドの棲息しているグライクンデー湿原から離れているので大した被害は出ていませんが、湿原に近いケルーマンの町では大変なことになっているらしく、私たちの教会からも二人、助けに行かせているのです。本来ならば、私たちがお助けしなければならぬところを、このようなお願いをするのは心苦しいのですが、町を守るため、あなた方のお力を貸していただけませんか？」

「私たちはそのために来た。紹介しておこう。彼らがこのバーミヤンを守るため、あなたたちを助ける。左からガーディナーフルプフ、バーンズタウンゼント、ロベールクリスタロスだ。彼らの下に司祭か僧侶を一人ずつつけた」

「それはありがとうございます」

ディオヌグが腰を折って挨拶をしたので、ガーディナーたちも返した。

「明日、ケルーマンの方にも小隊を五つ向かわせる。それと別働隊を組んで、カンダハルにも行く。事の元凶であるオミクロンを倒せば、この事態もいづれ収束

するだろう」

「オミクロンとはホーライ王国最後の神官長となつた人ですか？」

「そうだ。神官長を追われてラシユデイに拾われ、いまはゼテギネア帝国に与している」

デイオンヌはマチルダよりも年上で、ホーライ王国のことも覚えていそうな世代だ。オミクロンの名に唇をかみしめたところは、ケビンのように表に出すことはないにしても、彼に対して覚える静かな怒りをこらえているかのようだった。

「ケルーマンのことも重ねてお礼を申し上げます。ですが、私たちも町の方たちも戦いに慣れていません。自警団はありますが、差し支えなければ、あなた方が指揮を執ってくださいとありがたいのですが、お願いできないでしょうか？」

「あいにくだが、私たちはアンデッドが完全にいなくなるまでアンタリア大地に残るわけにはいかない。それにアンデッドの問題はアンタリア大地には以前からあったはず、あなたたちに戦う気があるのなら、その手助けはしよう」

「それは私の一存で決められることはありません。町の皆さんにも訊いてみなければなりません」

「私もいまず返事をしろとは言わない。オミクロンを倒すまでは彼らに指揮を任せてもいいが、そのままだでは私たちがいなくなつてから、あなたたちが困るだろう」

「わかりました」

「あと一つ教えてくれ。ケルーマンのロシユフォル教会の責任者は誰だ？」

「司祭のテイシアートマスさんです」

「ありがとう。」

ガーディナー、あとはあなたたちに任せる。だが彼女に言つたとおり、私たちがいなくなつた後のことも考えて動け。私たちはアンタリア大地にかまけているわけにはいかない」

「了解しました。ひとまず町長と自警団に会つて、それからどうするか決めた方がいいでしょう。それと拠点をロシユフォル教会に移した方がよさそうです」

それで彼女らとともに戻り、ガーディナーたち三つの小隊の者たちはすぐにロシユフォル教会に向かつた。

「ギルバルド、支度は済んだか？」

「だいたい終わりました。今日のところは宿に泊まるしかないようですか？ 天空の騎士と天使の方たちにも泊まつてもらうしかなさそうです」

「そうだな。それと、ケルーマンのロシユフォル教会の責任者はティシアートマスという司祭だ。リーダーを連れて挨拶に行ってもらいたいが、こちらが協力できるのはオミクロンを倒すまでだと断れ」

「それでは町の人たちが困ってしまうわ。解放軍としても放っておいていい話ではないのではないの？」

「ラウニーイーが口を挟んだ。」

「私たちの目的はゼテギネア帝国を倒すことだ。こんな辺境の地に戦力を割く余裕はない。ただし町の者に自衛手段は教える。オミクロンが元凶なら、いずれ、このような事態も収まるだろう」

「バーミヤン側では何と答えたのです？」

「ディオンは町の者と相談させると言っていた。」

返事は私たちが戻ってくるまでもいいが、ケルーマンではそんな余裕はないかもしれないな」

「承知しました」

ギルバルドは頷いたが、デボネアも口を挟む。

「本当に君たちだけで大丈夫か？ わたしもオミクロンには一、二度しか会ったことはないが、かなり強力な魔法の使い手だぞ」

「大勢で行っても攻められれば同じことだ。それよりも小回りのきく人数で行った方が速い」

「アンデッドもいるんだ。フォーゲル殿と聖剣があるとはいえ、気をつけて行ってくれ」

グランディーナは片手を上げて、待機していたエレボスに乗り込んだ。

そこへ四頭立ての馬車が走ってきて、エレボスの隣で急停車した。

「グランディーナ！」

馬車から降りてきたのはフリル付きのブラウスを身につけた〈何でも屋〉のジャックだった。呼ばれて振り返った彼女はすぐにエレボスを下りた。

「出発を遅らせる。待っていてくれ」

彼女はジャックを押し込めるように馬車に乗せると、自分もその後から乗り込んだ。

「それでは我々も宿に移動するでしょう」

ギルバルドが声をかけ、ケルーマンに行くことになった小隊の者たちは移動を始めた。デボネアとラウニーイーに続いてマチルダの小隊が行き、最後尾はライアンだった。

「宿に泊まるなんて言ってるが、こんなドラゴンなんか泊まらせてもらえるのかねえ？」

「まあ、行ってみろ。半神や天使だって一緒なんだ、ドラゴンだって断られねえかもしれないぜ？」

とカノーブス。

「ちえつ、あなたは呑気でいいぜ」

「頑張れよ！」

手を振って答えたライアンは、口で言うほどには心配していなさそうな顔であった。

「そんなに簡単にいくだろうか？」

「町の外に放り出すわけにはいかねえんだ。何とかごまかしても泊めねえとな。それよりジャックとの話は長いのかな？」

「いや、終わったみたいだ」

話していると、グランディーナが馬車を降りてきた。すぐに追いかけたジャックが彼女の手を取って口づけをする。

「ありがとう。二つでも手に入れて助かった」

「とんでもありません。お話を聞いた限りでは、それだけで用が足りるとはとも思えませんよ」

「二つで何とかするしかないな。」

出発するぞ」

彼女がエレボスに乗り込むと、その後ろにフォーゲルが乗った。ほかの者も二人ずつグリフォンに分乗する。サラディンとケビン、ランスロットとサンダース、シルバ、カノーブスとチャールス、グレート、ア

イーシャとレイカ、ユージンという組み合わせになって、五頭のグリフォンはエレボスを先頭に飛び立ち、南の方へ向かっていった。

〈何でも屋〉もそれをいつまでも見送っておらず、さつさと馬車に乗り込むと、いずこともなく消えたのだった。

「ユーシスは口実だろう。なぜ一緒に来た？」

「我々の目的はおぬしの監視だ。ユーシス殿のことが気になるのも事実だがな。それにカオスゲートの場所を教えるとも言っただろう」

「そうだった。だが、あなたに言われなくても、あのような事態を二度と引き起こすつもりはない。私もまだ命は惜しい」

「残念だが、おぬしの言葉を完全に信じるわけにもいかないのだな。それにシグルドで譲歩したのは我々の方だ。おぬしには多少の不自由さは我慢してもらわねばならん」

「勝手にしろ。だがちようどいい。アンタンジルについて詳しく教えてくれ」

「アンタンジルについて、どのようなことを知りたいたいと言うのだ？」

「遅かれ早かれ、いずれ私たちはアンタンジルに行かなければならなくなるのだろうか？ ならば、そこで迷わぬすべてをだ。あなたたちがガルフとの戦いを引き受けてくれるのだとしても、私たちとて何もしないでいいというわけにはいかなさそうだからな」

「アンタンジルにはできるだけ少人数で行くつもりだ。もちろんエインセル殿たちも連れていくつもりはない。天使は魔界の瘴気には耐えられまい。我々三人のほかにはサラディンが同行してくれば、おぬしたちに事情を説明するのに適任だと思うが、どうだ？」

「私も行こう」

「無理をするな。アンタンジルはこの地上に現れた魔界となってしまった。そこでする息は一口ごとに人の身を蝕み、そこで見えるものも聞くことも人の身に悪意を持っていよう。もしもそこで採れる物を一口でも食べれば、人は魔界に囚われ、やがて魔界の住人となってしまうだろう。それは暗黒道より、なお酷で確実なことだ。おぬしがアンタンジルに行けば、そのまま落ちてしまわないとも限らない。ガルフの復活は確かに厄介だが、奴が全盛期の力を取り戻すまでにはまだ時間がかかるはず、それよりもアンタンジルの瘴気にさらされることでおぬしが墮ちるならば、我らは当

初の目的を最優先で遂行する」

「あなたたちは、どうしても私をファイラーハの犬にしたいようだな」

「その方が最善の道だから言うのだ。天空の騎士になれば墮ちることはない。地上はおぬしという脅威を失うし、天界は最高の戦士を得る。地上に置いたままにしておくには、おぬしの力は大きすぎるのだ」

「天界のことなど知らないし興味もない。己の生き死にをファイラーハに左右されるのも真つ平だ。私は地上で生き、死んでゆく。万が一の時にはあなたたちの手を煩わせるには及ばない」

「確かに、おぬしの精神力の尋常ならざることは俺も認めよう。俺たち三人の誰も、それだけの力には耐えきれまい。ファイラーハの守りがあればこそ、これだけの力を振るえる、墮ちることもなしにな」

「あなたは暗黒道も極めた最強の戦士だったと聞いたが、天空の騎士になる前はどうかだったのだ？」

「そう、確かに俺は強かった。だからディバインドラゴンに挑むという愚挙も犯したし、倒した後のことを考えもしなかった。俺はおぬしのように墮ちる心配もなかったが、結果的にシグルドを分断させ多くの人を死なせてしまった。ディバインドラゴンを倒そうと

した時にすでに堕ちていたとも言えるだろう」

「馬鹿馬鹿しい。私が聞きたいのは、ファイラーハの喜ぶような戯言じゃない。それともあなたもスルストのように天空の騎士になったことを後悔していないと言うのか？ だったら、こんな話はおしまいにしてくれ。あなたたちに何と言われようと私は天空の騎士になる気などない。たとえ、この身がオウガになろうと誰かの意のままになるなど真つ平だ」

「そうはいかぬ。おぬしはすでに身をもつて体験したはずだ。堕ちれば破壊衝動は耐え難いほど増す。そうなったおぬしを誰が止められる？ おぬしがいかに望もうと、そうなる前に天界に連れていく。それが最大限できる譲歩だ」

「きりがない。アンタンジルの地理はどうなっている？」

「おぬしたちがアンタンジルに行くことはない。そんなことを訊いてどうする？」

「行く機会がまったくないわけではあるまい。それに知らないところの話聞くのは嫌いじゃない」

「なるほど。カオスゲートを出るとムバンダカという町だ。町の周囲は広大な湿地帯で、おそらくグアイクンデイー湿原よりも広いだろう。だがオウガバトル

のころはそれほど広い湿原ではなかった。魔界から漏れ出す瘴気がアンタンジルの大地を変えてしまったのだ。とところどころに底なし沼があつて、踏み入れると抜け出すこともできぬ。しかもそこには死霊がいて生者をおびき出そうとしていたり、取り憑いて殺そうとしていたりする。あるいは沼が魔界につながっていると言ふ者もいる。いくら浄化してもアンデッドが尽きることはなかったからな。だが事実は誰にもわからぬ。この地を我が物顔で歩くアンデッドさえ知ることはあるまい」

「そのムバンダカからガルフが封印されているところは遠いのか？」

「ムバンダカからイノongoの廃墟を経て、四日ぐらいでガルフを封印したところに着ける。それにアンタンジル全体は広い土地ではない。十日も歩けば、端から端まで歩き尽くしてしまうだろう」

「なぜ、そんなに狭い？ アンタンジルも元はゼテギネアの一部だったのではないのか？」

「魔界の瘴気を漏らさぬために、アンタンジルを境界の中に封じ込めねばならなかったからだ。ガルフを封じたところがその中心だ。そこもアンタンジルと呼ばれていた」

「結界の中にはムバンダカも入っているのか？」

「ムバンダカだけではない。アンタンジルにはほかにいくつか町があつたが、それらも全て結界の中だ。地上にありながら、アンタンジルへ行くのにカオスゲートを使わなければならぬのは結界のためだ。魔界の瘴気が拡がるのは速かつた。逃げ遅れた者を待つあいだに結界を張らなければならない土地は拡がり、瘴気はそれだけアンタリア大地にも漏れ出していただろう。地上に悪影響を及ぼさないためには広めに結界を張っておかねばならなかつたのだ」

「住んでいた人たちはどうした？」

「魔界の住人に変わつていっただろう。それも代替わりしたはずだ。アンタンジルでまともな人間には会えない。だがアンタンジルの民のことより己の身を案じるがいい。魔界の息はさほど人間に害をなす。だから我らは魔界に攻め込むことができなかつたのだ」

「そんなところにサラディンを連れていこうなんて、どうかしている」

「彼以外にアンタンジルで対処する術を心得た者がいないのでな。ほかの者を連れていっても結局、彼の負担となる。ならば最初から一人の方が良からう」

「魔界に攻め込むだなんて、ファイラーは魔界も我

が物にするつもりだつたのか？」

「オウガバトルは魔界が引き起こした。そのために地上や天界の被つた害は計り知れない。ファイラーはすべてを治めれば、うまくいくと考えられたのだ」

「愚かな。オウガや悪魔や魔界の者がファイラーに従うはずがない。太陽神らしく太陽の届くところだけ治めていればいい」

「結果的にはそうなつた。いまや地上にさえファイラーの威光が届いているとは言いかねる。たいがいの国の首長とは軍事的な権力を持つ者だからな。だが、それは仕方のないことだ。オウガバトルで勝利を収めたとはいえファイラーの力も衰えた。神代は遠い、いずれ人は神を必要としなくなろう」

「それでも、あなたたちは神に仕えるのか？」

「ファイラーに使えることが元々、一方的な契約なのだ。俺はダイバインドラゴンを殺した罪で天空の騎士となり、スラストやフェンリルも天空の騎士となつたことは己の意志でだが、そもそもアヴァロン島に囚われたことが強制的だ。もしも俺たちがファイラーに仕えることを辞めたいと思つても、かなえられることなどあるまい。神が地上を歩くことはもはややない。代行者としての我々は必要なのだ」

「あなたたちでも辞めたいと思う時があるのか？」
「さあ、どうだろうな。スラストやフェンリルは知らないが、俺も人であつた時よりも天空の騎士である方が遙かに長い。もはや人であつた時のことは忘れてしまつたよ」

その夜、グランディーナたちはバーミヤンの西方にある小島に降り、そこで休んだ。

「グリフォンに乗つて、こんなに長距離移動したのは初めてだ。あまり楽なものではありませんな。すっかりくたびれてしまいましたよ」

珍しくケビンがランスロットに愚痴をこぼす。

「だから言つただろう、あんたは力を入れすぎなんだつて。あんな飛び方で馴らされたグリフォンが乗せてる人間を落とすなんてありえねえ。もつと肩の力を抜いた方がいいぞ」

「慣れもあるだろう。みんな、君たちほど魔獣に慣れていない。」

わたしも初めて乗つた時は疲れたものですが、いまでは慣れました。二、三日も乗れば慣れますよ」

「カストラート海まで行かれた方は違いますな。お二人はグランディーナ殿とも、よく一緒に行動してお

いでだ。疲れたの何のと言つていられませんな」

「そうでもねえぞ。グランディーナの頑丈さは特別だ。俺たちだつてつき合いきれたものじゃねえ」

「そう言うな」

カノープスが笑い、ランスロットとケビンもつられた。そこへアイーシャが三つのお椀を抱えてきた。

「皆様、薬湯を作りましたので、どうぞ」

「これはかたじけない。さてはアイーシャ殿、今の話を聞かれましたかな？ 騎士たる者がグリフォンに乗つたぐらいで疲れたと弱音を吐くなど、みつともないところをお見せしました」

「とんでもありません。私はただ皆様がお疲れのようだったので、薬湯をお作りしただけです。ケビンさまのお話はまったく聞いておりませんでした」

「それは却つて余計なことを申し上げましたな。はは、失態失態」

そう言つて大きな身体を揺すつて笑いながら、ケビンは焚き火の方に戻つていった。

「苦いなあ、こいつは」

「良薬口に苦しと言ふじゃないか。苦い方がよく効くのさ。それよりケビン殿が弱音を吐くぐらいだ、皆は大丈夫だろうか？」

「心配してもこればかりは慣れるしかないからな。アイーシャだつて最初は鞍ずれを起こしたが慣れただらう？ レイカはそこまでひどくないらしいし、ほかの奴らだつて大丈夫じゃないか？ おまえ、サンダースと一緒にたんだらう？」

「彼は口に出せないほど疲れていたようだつたな。

レイカだつて鞍ずれはできなくても大変だつたんだらう？」

「はい。そのお二人の具合が良くありません。レイカさまは食事も取らずに寝てしまわれました」

「携行食では食欲も出ないだらうからな」

「薬湯ぐらい飲ませたんだらう？」

「はい」

「後は本人次第だな。いくら疲れているからつて、この島に置き去りにするわけにもいかねえだらうし」

「この蒸し暑さも良くないのだらう。皆も無事だといいが。」

さて、わたしたちも戻るとしよう」

「グリフォンは放つておいてもいいのですか？」

「ああ。エレボスがいれば、あいつらは勝手に飯を食いに行く。餌の持ち合わせもないし、任せるさ」

「なんだ、君が来なくても大丈夫だつたらうに」

「だからつてバーミヤンで留守番なんかしてられるか。守りにまわるのは趣味じゃねえ。疲れも溜まつてないし、だいいち俺がいなかつたら偵察にだつて不自由するだらうが？」

「そういうことにしておくよ」

三人が戻ると、グランディーナが携行食糧の包みを手渡した。

「夜営はフォーゲルがやるそうだ。休んでいいぞ」

「いくら天空の騎士殿が眠らないからといって、そこまで甘えてもいいのか？」

「戦闘になつても、どうせ当てにできない。こんなことぐらいでしか頼れないのなら、使わぬ手はないだらう。明日は遅くに出発する」

「わかつた」

彼女はそれだけ言うとすぐにいなくなつた。

「それにしても、ここは夜になつても暑いな。バーミヤンに比べたら風があるだけ、まだましなように思えるが」

「ケルーマンはもつと暑いぜ。あそこは海から遠くで風が弱いらしい」

「それはギルバルドたちが気の毒だな」

彼らが話しているあいだにも、チャールスがサン

ダースの隣で休み、レイカは皆から離れたところで横になつてゐる。ケビン一人が槍を振り、就寝前の鍛錬に忙しそうだ。鎧はとうに脱いでいたが、もう一度ランスロットたちに混じつた時には滝のような汗をかいていた。

「疲れた時にまで鍛錬してねえ方がいいんじゃないのか？」

「長年の習慣でこれをやらんと落ち着かんのです。怠るとすぐに贅肉もついてしまいますしな。それにこれぐらい疲れたうちには入りませんぞ」

そこにサラディンが加わつた。グランディーナは先ほどからフオーゲルと話し込んでゐる。

「サラディンさま、こんなに暑いのに焚き火は必要なのですか？」

「灯りは必要だ。アンデッドが来た時のためにも、あつた方がよい」

「ではもう一つ教えてください。なぜ、オミクロンという方はアンデッドばかり造られるのでしょうか？」

アンデッドはとも気毒な存在です。本当は死んで安らぎを得られたはずなのに、この世に無理に呼び出されてしまったから生者を憎んでいる。だからアンデッドは私たちを襲うのだとうかがつたことがあります

す。私たちロシユフオル教会の者がアンデッドを浄化する術が使えるのも現世に囚われた魂を解放するためだと教わりました。ましてやアンデッドを造り出すのに天使さまの力を使うなど、恐ろしいことです」

「ホーライ王国の神官長の位にあつたオミクロン殿がどうして死霊術に手を染めるようになったのかは誰も知らぬ。だが、ここアンタリア大地には昔からアンデッドが出没する。オミクロン殿がアンタリア大地に来た時、憐れみ、あるいは好奇心からアンデッドについて学んだのかもしれない。しかし道を踏み外すのも容易なことだ。手慰みのつもりがいつか本職になつた例はいくらでもある。オミクロン殿は死霊術のためにホーライ王国を追われたが、同時にラシュディ殿に助けられた。ならば、その技をますます磨こうと考えるのも自然な流れかもしれない」

「そのためにたくさんのアンデッドを生み出していと仰るのですか？」

「アンデッドは恐れも疲れも知らぬ。いまのゼテギネア帝国には重要な戦力となるう」

「それでも死霊術は必要な技なのでしょうか？」

「相手のことを知らないで戦うことはできない。わたしも死霊術は一通り学んだ。ただ使わぬだけだ」

「使う人の心次第で剣もただの殺戮の道具となります。どのような力を持っていても制するのは人だということですね」

「そうだ。もう休みなさい。多少グリフォンに慣れているとはいえ知らぬ土地での行軍はいつもより疲れるはずだ」

「はい、ありがとうございます」

サラディンとケビンが先に行き、アイーシャも休みに行った。ランスロットがグランディーナとフォージェルの話がまだ終わらなさを確認してからカノープスの方を見ると、彼がちょうど小瓶をくわえたところで目が遭ってしまった。

「何だい、それは？」

「見てわからねえか、酒だよ、酒。大した量でもないが景気づけさ。おまえやグランディーナに言っても理解されないだろうが、あるのとないのとじゃ大違いなんだ」

「だったら、君たちのために天空の島から酒をもらってくればよかつたかな」

「へえ？ おまえが飲ませたいと思うほど美味かつたってことか？」

「そうではないけれど、スルスト殿もお酒が好きな

方だからな。酒を分けていただけじゃないか、頼んでみれば良かったよ」

「スルストに？ いや、そいつはしないで正解だろう。くれるからって無心してみる、あの調子でどんな難癖をつけられたか、わかつたものじゃねえぞ」

「スルスト殿は悪い方ではないよ」

「俺たちに無理は言わねえだろうが、酒のためにグランディーナに面倒かけるわけにもいかねえからな」

「そうか」

「それにファアレンたちだつてご馳走のひとつもよこすでなし。酒もあるならあると言ってくれば、いくらでも試飲してやつたのに。どうも天空の島の連中は俺たちを強欲だと思つてやがるらしい」

「君とギルバルドは底なしだ。天空の島の酒樽を空にしてしまうつもりかい？」

「そこまで欲の皮が突つ張つてるつもりもねえが、せつかく行つたのに、自分たちの持つていった分しか食わなかつたのはもつたいなかつたろう？」

「半月分も持ち合わせがあつたのか？」

「ガルビア半島にいた時に一回、スnetzバルに戻つたじゃないか？ あの時に買いに行かされたんだ。携行食糧ばかりだから、参つたがね」

「それは気の毒なことをしたな」

「まったくさ」

カノープスが腰を下ろしたので、ランスロットもつられた。バルタンは小瓶を大事そうにしまいこむ。半バス(約十五センチメートル)足らずの大きさからいっても、その瓶に大した量が入っているはずはない。

「それにしても天空の騎士が眠らなくていいとは聞かされていたが、実際に見ると驚かされるな」

「スラスト殿の話だと、眠る必要がないだけで眠ることはできるそうだがね」

「だからつて、一晩中、見張りに立つてるなんて、そう言えることじゃないぜ？」

「フォーゲル殿はそういう方だよ。シグルドではあの方がデイベインドラゴンを倒したので島が分断されたといつて反発を買われていたが、わたしは信頼に値する方だと思ふ。少し厳格すぎるころはあるかもしれないが誠実な方だよ」

「グランディーナは嫌つてるみたいだけどな」

「彼女の立場を思えば無理もないさ。でも夜営を任せられるほど信頼はしている。だろろう？」

「なるほど、と言いたいところだが、あいつの信頼はパンプキンヘッドにも向けられるからなあ。俺には

理解できん」

「我々が知らないだけでパンプキンヘッドにもいいところがあるんじゃないか？」

「おまえ、それを本気で言つてるのなら恐れ入るぜ。まあ、フォーゲルに関しては何意してもいいけど」

「彼女は理由のない評価はしないよ。確かにパンプキンヘッドの攻撃は当てにならないけれど、彼らの存在はそれだけのものではないのだろう」

「おいおい、どういう風の吹き回しだよ。まさか、おまえまでパンプキンヘッドを買つているなんて言い出すんじゃないだろうな？」

「わたしは彼女ほど達観できないよ」

「そいつは違いねえ！」

カノープスが伸びをして、大きなあくびをした。

「あつちの話は終わりそうにねえし、そろそろ俺も寝るか」

「そうしよう。いくら明日の出立が遅いからといつて昼過ぎまで寝ていたら鬢ひんしやく鬢を買つてしまう」

「おまえは早起きじゃねえか」

「ゼルテニアでは日の出とともに起きて日の入りとともに休むのが当たり前だったんだ。そう言う君だつて十分、早起きじゃないか」

「俺はグリフオンの面倒を診てやらないとな」

しかし、そう言いながらカノープスは横になった。それを見てランスロットも身体を横たえる。そこから先は競争のように、どちらからともなく寝息が聞こえて二人は眠った。

幸いなことにアンデッドは来なかった。グアイクンデイー湿原を渡るアンデッドの群れの進路は、この島からは外れているらしかった。

翌閏竜の月二三日、ギルバルドに率いられた五つの小隊がバーミヤンを発ち、街道を南下した。目指すケルーマンは短い街道の終点にある。アンデッドが出没するとはとても思えないのどかな田舎で、ただ肌にはりつくようなしつこい暑さだけがゼテギネアのどことも違っていた。

「ここらで昼食にしよう!」

ギルバルドが声をかけ、皆の歩みは止まった。マチルダの指示で携行食糧と水が配られ、皆が思い思いの場所ですむ。

「こんなところにアンデッドがいるなんて嘘みたいね。ちよつと暑すぎるけれど、悪いところでもないじゃない」

「とんでもありません、ラウニイーさま。肌がべたついて私はこんなところにいつまでもいたくありませんわ。早くアラムートの城塞に戻りたいです」

「やつぱり君はアラムートに残っているべきだったんだ。君のような人が戦鬪なんて危ないじゃないか」
 「そんなことを言つて私を帰そうとしてもだめよ、クアス。それに私だつて帝国教会の法皇だったのだから、少しぐらい役に立てるわ」

「そうよ、デボネア。今回はアンデッドとの戦いのだから、私たちの役目はノルンたちを守ることよ。彼女がアンデッドに傷つけられるなんて不名誉なこと、ないようにしてよね」

「心得ております、ラウニイー殿」

「そろそろ出発するぞ!」

ギルバルドが声をかけたので、デボネアたちのおしゃべりもそこで中断された。ギルバルドとユーリアを先頭に皆が動き出し、さらに街道を南下していった。一行は夕方にはケルーマンに到着し、ロシユフォル教会の責任者であるテイシアートマスという司祭に面会した。さらに彼女の案内でケルーマンの町長に会い、協力することを伝えると歓迎を受けた。

「この町には元々、自警団がありませんでした。い

くらダイクンデー湿原が近いといつてもアンデッドがやってくるのは年に一回あるかないかです。そのような時はロシユフォル教会の方にお祓いしてもらうのが常でした。ところがここ一ヶ月ばかり、アンデッドの数が増えてきました。早急に自警団を募りました。腕に覚えのある者もおらず、どうしたものか途方に暮れていたところで。そこへ解放軍を名乗る方々がやってきて、わたしたちを助けてくださっていたのですが、その方たちもいなくなってしまう、わたしたちは門を閉ざす以外に何もできないでおりました」

「それは申し訳ないことをいたしました。彼らは我々の仲間で、先にアンタリア大地の偵察に来ていたのだ。

昨日、バーミヤンで合流し、このような状況を聞かされたので、こちらに伺った。だが我々も今回の騒ぎが完全に収まるまでアンタリア大地に残るわけにはいかない。我々の仲間が今回の騒動の元凶となつてはオミクロンを倒しに行つてはいるが、オミクロンを倒してもアンデッドが完全にいなくなることはあるまい。そこで提案なのだが、こちらの自警団の方々に敵と戦う方法について指南するのはいかがであろう？ もちろん戦いに慣れるまでは我々が先導しよう」

「私からもお願いします。いまはバーミヤンから二

人、応援に来てもらつていますが、彼女たちはいずれ戻らなければなりません。今後、私たちだけでは手が足りなくなることかもしれません。ケルーマンは私たちの町です。私たちの町は私たちが守るべきです」

テイシアの言葉にケルーマンの町長は困つたような顔になつた。

「それほど時間がありませんが、自警団の者と話していただいた方がよろしいでしょうな」

「そのようだが我らの方で赴かせていただく。その上で、どのような手伝いができるのか、相談させてもらおう」

「承知しました。それではよろしくお願いします」

その後、ギルバルドはテイシアや自警団の者たちと協力して、四方の門に各小隊を配置した。ダイクンデー湿原に面した南門にデボネアとライアンの隊を、東門にマチルダ、西門にラウニー、北門に自分の小隊という配置で、さらにともに来たアラデイたちを町の中央に近いロシユフォル教会に置いた。それぞれの門にはロシユフォル教会に勤める司祭や僧侶たちもあり、自警団の若者たちもいたが、テイシアによれば、彼女たちを補助し守るだけの仕事も、それほどうまくいつているとは言いがたいそうだ。

「我らの目的はケルーマンをアンデッドより守ることだが、あくまでも主体はケルーマン側にあることを忘れないでくれ。テイシア殿の話では自警団の者はなかなか自主的に動けないそうだが、我らの助けるべきは彼らが自分から動けるようになることだと心得ておいてもらいたい」

ギルバルドはリーダーたちにこのように話して、それぞれの小隊を位置につけたのだった。

辺りが暗くなり、ケルーマンの町中に灯りが目立つようになつたころ、その音は遠くから聞こえてきた。骨の鳴る音が、グライクンデュー湿原の方から届くようになった。

南門のプロミオスは、その音を聞くと不機嫌そうに吠えたてた。ケルーマンの門番たちは恐ろしそうにフレアグラスを見たが、ドラゴンは鼻孔から煙を吐き出すだけで、それ以上は何もしない。

やがてカノープスが言っていた骨の鳴る音が街壁に響くようになった。それは門に当たり、街壁をひっきりなしにたたく乾いた音だ。湿原の向こうからやってくる死者たちの声なき声のようだった。

南門の詰め所に昇つたデボネアは、煌々とした月明

かりに照らされて無数のスケルトンがこのケルーマンに近づいてくるのを見た。目をこらすとスケルトンのなかに半透明の亡霊や悪霊が混じっている。スケルトンは街壁に阻まれて町の中に入つてくることはないが、問題は亡霊や悪霊たちだ。そして眼下でも、無数のスケルトンが門や街壁をたたき続けていた。

また、いくらかのアンデッドたちは端からケルーマンを無視して、さらに北上していった。

「これは聞きしに勝る光景だな。元を正せば、彼らも気の毒な犠牲者なのだろうが、このまま座して見過ごすわけにもいかないか。」

諸君、貴公らの手を貸してくれ！」

彼が詰め所から飛び降りると、戦い慣れていない若者たちは驚異でも見たような眼差しを向けた。

「もつとも、アンデッドと戦うにはいくら強力な剣があつても足りない。アンデッドに対抗できるのは魔法か聖別された武器だけだ。だから、わたしたちの仕事は彼女たちを守るしかないんだ」

そう言つて彼がノルンを引き寄せると、集まつた者のあいだから笑いがもれた。

すかさず彼女が侵入してきた亡霊に呪文を唱える。

「聖なる父ファイラーハの慈悲深き御名において命ず

る。汝、迷える霊よ、この世のくびぎより放たれよ。安らぎを知らぬ魂よ、所在あるべきところの処に還れ！」

亡霊は誰かに触れる前に、うなり声をあげて消えた。

「お見事、ノルン」

「これぐらいは元法皇として当然よ。だけど、あの音は確かに耳障りだわ。止めさせることはできないのかしら？」

「そう簡単に言わないでくれ。後から後からスケルトンがやってくるんだ。倒しきれぬものじゃない」

だが門の前に陣取ったライアンは、さも退屈そうに大あくびだ。

「打って出ないのかい、デボネア？　いくら害がないからって、こんな音を一晚中間かされるのはたまらねえぜ」

「そうね。私たちが早めにアンデッドを消滅させた方がいいんじゃないかしら？」

デボネアはノルンとライアンを招き、詰め所に昇りなおした。今日の月はかなり明るいのでケルーマンの南に広がる湿原の方まで眺められる。そこから波のように押し寄せてくるアンデッドの群れもよく見えた。

「こいつは、俺たちの手に負える数じゃねえな」

「そうだろう？」

ノルン、君も無茶を言うのはやめてくれ。もしもこの門が破られたら、あれだけの数のスケルトンには我々だけでは対抗できないよ」

「そうね、ごめんさい」

三人が詰め所から下りてくると、プロミオスが門に向かつてうなり声をあげている。

「どうしたんだ、いったい？」

「門をたたくのは昨日や今日、始まったことではありませんが、今晚はその音がひととき強いようです」

「それは良くない報せだな。君、すまないが、ロシュフォル教会に行つて、ギルバルドにこのことを伝えてきてくれないか」

「かしこまりました」

ケルーマンの自警団の若者は即座に走つていった。

「なんだ、門が破られるとでも思っているのか？」

「そうならないよう開けた方がいいかもしれない。いまからこの門を作り直すには時間が足りないだろうからね」

「でも、あんなにたくさんさんのアンデッドが来たら守りきれないわ。私たちが一度に浄化できる数はそんなに多くないのですもの。それにいくらあなただつて一晩中、戦い続けることはできないでしょう？」

「だからギルバルドの判断を仰ぐ。もつともグラン
デイーナに訊いたら、速攻で開けると言われるかもし
れないがね」

「どうだろうな、この門は。いくら強くたたいてい
るからって破城槌なんか持ち出してはいるわけじゃねえ
だろう。そんなに簡単に壊れねえと思うがな」

「ですが、その門はかなり古い物です。アンタリア
大地は二四年前の戦争でも戦場にならなかつたので街
壁の修復が行われたのもかなり昔のことになります」
そう話しているあいだにも門は音を立てて揺れ続け
ている。

「古いと言うが前に替えたのはいつのことだ？」

デボネアに訊かれて自警団の若者たちは顔を見合わ
せた。はつきりしたことは誰も知らなさそうだ。

「こいつは、かなりやばいんじゃないか？ いまま
で無事だったのが不思議なくらいだ」

「そうだな」

そこにギルバルドとテイシアが走ってきた。

「まだ大丈夫なようだな」

「だが破られてからでは手に負えない」

「フレドール殿がいれば、このようなことにも詳しい
のだがな。しかし、この門を開けたところで我らに耐

えられる戦力はあるか？ それに門が古いことは、ほ
かの三つの門でも同じ、それらを同時に守るのは、い
まの戦力では難しかろう」

「ならば、このままにしておけと言うのか？」

「ほかに手はない。だが、ここに防塞を築こう。」

おぬしたち、町の者に頼んで家具などを集めてくれ。
わたしはほかの三つの門に行ってくる」

「ギルバルドさま、私も参ります。」

あなたたちも急いでくださいね」

「わかりました！」

それを見たライアンがプロミオスを門に近づけた。

「何をするんだ？」

「こいつの身体なら門を押さえておくのに役に立つ
だろう。フレアブレスにしては小さい方だが、もう火
の粉は帯びていないし使えると思うぜ。」

ギャネガー！ おまえも来るんだ」

二頭のドラゴンが門にくつつくと音はようやく収
まったが、街壁をたたく音は静まらなかつた。

そのあいだにも亡霊や悪霊が町に入ってきていたが、
ノルンやほかの司祭の手で消滅させられた。

そして町の者たちが持ち寄った家具が積み上げられ、
防塞が築かれた。プロミオスとギャネガーは今度は防

塞の内側に陣取った。

「こんな物でアンデッドをしのげるのかねえ?」

「要は奴らの足を止めればいいのだからな。この防塞が破られない限り、一度に侵入してこられるアンデッドはせいぜい一体か二体だ」

そこへ、再びギルバルドが戻ってきた。

「マーウォルスとメラオースは西門と東門に置いてきた。どうやら、北門はアンデッドの進路から外れているらしい。それにしてもずいぶんと積んだものだな。これならば、門が破られた時にもまだ持ちこたえることができるだろう。今晚はこのまま様子を見てくれ。明日になったら町の者たちと相談する。鉄の板で補強できたらいいのだろうが、アンタリア大地全体にもそれだけの鉄はないだろう」

「明日になったら、町の連中にもつと家具を出させるといい。俺たちにとつちや、防塞の厚さが生命線になるだろうからな」

「アンデッドに火を使うという知恵が働くとも思えないしな」

たまに侵入してくる亡霊や悪霊を退治しながら、闇竜の月二三日から二四日にかけての夜はこうして更けていった。皆は一睡もせず交替で南門を見張つてい

たが、やがて夜が明けるとともにあれだけいたアンデッドは潮が引くようにいなくなり、いつものような朝が訪れたのだった。

闇竜の月二四日、ギルバルドは引き続きテイシアとともにケルーマンの有力者と会い、門のことや防衛について相談に乗った。

「門が破られたら事です。町の皆さんに防塞が築けるような家具や木材の供出をお願いします。ですが、ケルーマンの門は町ができて以来、一度も取り替えられたことがないのです。ケルーマンだけでなくアンタリア大地全体が同じような事情でしょう」

「いまからでも門を換えることはできませんか?」

「難しいでしょう。このケルーマンだけが襲われていくわけではありませんしアンタリア大地にそんなに大きな木は見つかりません。ほかのところから輸送してもらうには日にちがかかりすぎます。万が一、破られた時には解放軍の方々のお力を頼りにするしかありません」

「湿原にいちばん近い南門だけならともかく、複数の門が破られた時には自警団と我々の力だけで持ちこたえられるかわからんが、全力は尽くそう」

「ありがとうございます、ギルバルドさま。」

それでは皆様方、解放軍の方たちは昨日、ケルーマンに着いてから、どなたも眠っていらつしやらないのです。ゆつくり休ませてあげてください」

「そうでしたな。」

それでは今晚もよろしくお願いしますぞ」

「いや、アンデッドと戦うことになったら、自警団の方たちともに戦つてもらおう。これはアンタリア大地にいる、あなた方の問題だ。偶然ここに現われた我々を必要以上に頼つては、我々がいなくなつた時に同様の問題が起こつても対処できないだろう。それは失礼いたす」

ギルバルドが立つと後をついてきたのはテイシアだ。けだつた。町長以下、出席した者たちは呆気にとられ、返す言葉もないようだ。

「あのように言つていただけで、ロシユフオル教会の者としてお礼を申しあげますわ」

「なぜ、そのようなことを仰るのだ？」

「アンタリア大地はホーライ王国があったころまでは王都に附属する直轄領として優遇されていたのです。それがホーライ王国が滅亡して以来、ゼテギネア帝国には見向きもされず、もともと封印の地というだけで

何の産業もない辺境の地に落ちぶれてしまいました。多くの人がアンタリア大地を離れましたが、この土地にしがみついて離れられない人も多かつたのです。二四年も経つて、ようやく自活できるようになりましたが、解放軍がゼテギネア帝国を倒した後にできる国には、また特別な場所と認められたいと思つている方も少なくありません」

「だが、そのためには封印の儀式を復活させる必要があるだろう。最後の神官長となつたオミクロンの放逐以来、その知識は失われたと聞いているが、ロシユフオル教会の方々はご存じか？」

「いいえ。オミクロンはロシユフオル教会とは何の関係もありません。どのような理由で神官長と呼ばれているのかも存じません」

「天空の三騎士の方々ならば存じていようが、いま訊くことでもないな。テイシア殿も早く休みなさい」
だがギルバルドにはわかつていた。自警団の若者たちを戦闘に引つ張り出すのは容易ではない。かといって解放軍だけでは、いざ門が破られた時には対応しきれないだろうと。

その日の夕方に起き出した解放軍は、ライアンと四頭のドラゴン以外は昨日と異なる門の守りについた。

昼間のあいだに住民が築いた防塞はより厚く、強固なものになっていたが、実際にアンデッドが攻め込んできた時にどれだけでもつかはわからない。

しかし、闇竜の月二四日から海竜の月一日の晩にかけては、その前の晩と違ったことは起こらなかった。ケルーマンのどの門もアンデッドにたたかれても、さらに一晩、持ち堪えたからだ。

けれど、夜が明けてから街壁の見回りに出向いたギルバルドは、どの門にも無数の傷痕を見出して暗澹たる気持ちになった。スケルトンは武器を振るって門を壊そうとしている。壊されるのは時間の問題だろう。

そして、そのことを彼から知らされた解放軍の一行も、アンデッドとの戦いをいよいよ覚悟したのである。

そのころ、グランディーナたちはアンタリア大地の西の海沿いにカンダハルを目指していた。野宿した島のずつと南側の島にカオスゲートがあるので、その確認も目的の一つだ。彼女たちがカオスゲートの場所まで来たのは闇竜の月二四日のことだった。

「ここでむやみにカオスゲートを開けてはならぬ。アンタンジルから悪魔が来てしまうからな」

カオスゲートの位置を示しながら、フォーゲルが告

げる。

「あなたがアンタンジルに行ったのは何千年も前のことだろう。なぜカオスゲートの位置がここだと言いつける？」

「このカオスゲートはほかのカオスゲートと性格を異にする。これは二度と開けてはならぬカオスゲートだったのだ。ガルフが封印されている限り、このカオスゲートを使つてはならなかった。だが、封印が破られ、ガルフが復活するという徴候が見られた時、再びカオスゲートからアンタンジルへ行く時のために、この石碑がその目印として残されたのだ」

「なるほど。私の目にはこれは崩れかけた石の柱にしか見えないが、あなたはこれがなぜ、ここに置かれたか知っているのだな」

「そうだ。だが、いまはこれぐらいでよからう。今日の行程はそれほど長くないが、カンダハルへ近づくとしよう」

「今日はどこで休む？」

「この島の南に二つの無人島がある。そこならばアンデッドも来なからう。カンダハルに行くのは明るくなつてからの方がいいからな」

「わかった」

それで彼女たちは再度グリフォンに乗り直して、フォーゲルの言った島まで飛んでいった。そこから南は大陸が続いていて、海を離れると険しい崖があり、グライクンデイー湿原の南端がここらまで伸びている。アラデイの報告では、暗くなるとカンダハルからアンデッドが切れることなく出てくるということだったので、夜に地続きの場所にいるのは得策ではなかった。「ケビンさま、グリフォンの騎乗には慣れられましたか？」

「昨日よりはだいぶましですか。あなたにばかり気を遣わせて申し訳ない」

「それが私の仕事ですから、お疲れでしたら遠慮なく仰ってください。疲れを取る薬草も持ち合わせておりますし」

「かたじけない。早速いただきましょう」

「はい」

しかし食事を取るには半端な時間だ。陽は西の空に高く、日没まではまだまだかかりそうだ。

「我々だけ、こうしているのが申し訳ないくらいですな。いまごろ、ケルーマンやバーミヤンでは皆が大変な目にあつておりましょうに」

「そうですね。ですが、いまはみんなを信じましょ

う。わたしたちの役割はオミクロンを倒すことです。

それ以外のことには思い煩うような余裕はありません」

ケビンは重々しく頷いて、アイーシャの差し出した薬湯を飲んだ。彼女は皆にも薬湯を配ったが、レイカはグリフォンに乗るのが初めてなので、それを手伝う元気もないようだった。

そこへグランディーナとサラディン、フォーゲルが戻ってきた。カノープスはグリフォンの傍にいる。

「小さな島だな。木も生えていないから、島の中央に行けば、島中を見渡せる」

「何もなかったようだね？」

「つまらないところだが大陸で夜を明かすのは危険だ。ここで明日の朝まで待とう」

「しょうがないな」

「封印の儀式とはカオスゲートがあつた島で行われていたのですか？」

ケビンの問いに頷いたサラディンは、フォーゲルの方を見やつて立ち上がった。

「わたしもそれほど詳しいわけではない。その話なら天空の騎士殿にうかがつた方がよからう」

そう言うのと彼はすぐにフォーゲルを呼びにいった。

「封印の儀式が行われていたのはカオスゲートの近

辺ではない。カンダハルでだ。この大地には魔力を集めやすい場所がある。カンダハルとはそのような土地のひとつだ。そこはアンタンジルへのカオスゲートから遠いのだが、この近隣ではカンダハルで儀式を行うのがいちばん効率が良かったのだ」

「では封印の儀式は最初からカンダハルで行われていたのですな？」

「そうだ。その知識は失われたと考えているようだが案ずることはない。ガルフを倒したら伝えよう」

「それはかたじけない。ですが差し支えなければ教えてください。なぜアンタンジルは封印されねばならなかったのです？」

「アンタンジルという土地はもともとは地上の一部だったのだが、魔界に通じるカオスゲートがあり、オウガバトルの時に最も多く使われたせいで、その毒気に長くさらされてしまった。我々が行った時には、ほとんど魔界と化していて悪魔やオウガが力をつけるほどであった。我々はそのためもあってアンタンジルに逃げ込んだガルフを封じ、さらにアンタンジルそのものにも封印を施した。放っておけばアンタンジルからアンタリア大地にも魔界の毒が流れ込んできて長い時間をかけて地上を冒しただろう。だが我々がガルフを

封じてから、もう何千年も経ってしまった。封印の儀式は地上に残れなかった我らの代わりに行っていた補助的な措置だ。儀式が行われようと途絶えようとガルフが解放されるのは時間の問題だっただろう」

「そのように言っていたけるとホーライ王国の者として救われます。オミクロンを許し難いと思う気持ちに変わりはござらんが」

その時、フォーゲルの後方で五頭のグリフォンが一斉に飛び立った。その姿はたちまち北の島に向かい、エレボスを先頭に力強く飛んでいった。

「いいですなあ、グリフォンは」

「なぜです？」

「自力で食糧を調達できません。我らは大して美味くもない携行食糧で我慢しなければならぬというのに。もちろん狩りの結果が出ないという危険も冒さなければなりません」

「エレボスに頼んで獲物を譲ってもらいますか？」

「いやいや、これも騎士の務め、酒がないの食糧が不味いなどとほざいては戦っておられません。そうでなくても、わたしはこのとおり腹回りが肥えすぎておる。ヨハンから少し痩せろと言われたのです」

「なぜヨハン殿が？」

「彼は補給部隊のリーダーですぞ。わたしの鎧だけ特注になると言われまして、お目玉を喰らったのですよ、お恥ずかしい話ですが」

そう言つてケビンが高笑いしたので、ランスロットやアイーシャもつられた。確かに彼はギルバルドやカノープスに劣らぬ酒豪だし大食漢だ。もつとも、その鎧は大事にされているらしく、当分、取り替える必要はなさそうだった。

「ところで」

と彼は急に声を潜めて、

「グランディーナ殿はいつも、ああして寝てばかりなのですかな？」

とランスロットに耳打ちした。

「このように待つ時はよく。寝つきもいいですが寝起きも早いですよ」

「それはぜひ、わたしも見習いたいものだ。こここのところ寝つきが悪くてかなわん」

「何かお薬を調合いたしましょうか？」

「それには及びませぬぞ。不眠というわけではありませんからな」

やがてグリフォンたちが戻ってきたころ、ランスロットたちも食事にした。

今夜もフォーゲルが見張りに立ったが、焚き火を見ても近づくアンデッドはいないらしかった。

海竜の月一日未明、ついにケルーマンの門が破られた。皆の予想に反し、最初に破られたのは南門ではなく東門だった。南門にはプロミオスとギヤネガーがいて防塞とともに門を塞ぐのに一役買っているが、東門にはいちばん身体の小さいメラオースしかいないので、そのせいもあつたのかもしれない。

その時、ギルバルドは西門にいたが、ユーリアが飛んできて事態の急変を報せた。

「ギルバルドさま！ 東門がアンデッドに破られました！」

「ついに来たか。今日の東門は、デボネア殿の担当だったな」

「はい」

「ですがギルバルドさま、こちらの門も破られるのは時間の問題なのではありませんか？」

すかさず言つたマチルダの言葉に彼は頷いた。

「東門が破られたならば南門も危険だろう。デボネア殿にはこのままの戦力で東門を死守してくれと伝えるしかない」

「わかりました」

しかしユーリアが戻って、さほど時間も経たぬうちに南門のオーウェルⅡグスタフが破られたことを伝え、ギルバルドがユーリアに言ったのと同じことを話しているうちに、ついに西門も破られた。

これでケルーマンの町は三方の門をアンデッドに破られ、その侵攻を許してしまったのである。

南門と西門は過剰かと思われるほど積み上げた防塞がアンデッドの侵入を許してもさらに立ちはだかっていった。スケルトンが防塞を越えようとするあいだに浄化魔法が放たれ、崩れていく。

北門を除く三つの門には、解放軍の者も含めて、それぞれ三人の司祭と僧侶が配置され、交代でアンデッドに対処していたが、防塞を乗り越えようとするアンデッドの数には足りがなかつた。

それに防塞は元々、門が破られた時にアンデッドの足を止めるために築かれたので、その上に登って戦うというわけにもいかない。

幸いなのは防塞のおかげでスケルトンも容易に町に侵入することができず、一度に侵入できるのはせいぜい二体か三体だったが、それも放っておけるものでは

なかつた。

東門の防衛に当たっていたデボネアは率先して先頭に立ち、スケルトン相手に剣を振るつた。それは決してアンデッドを倒せない攻撃だったが、彼の後ろにはノルンやユーリア、それにかつての部下たちがいる。彼女らを守るために剣を振るうことを彼も、かつて剣の持ち主だったファイガロも空しいとは言わない。

「デボネア殿、交代しましょう！」

「頼む！」

ステイングⅡモートンが前に立ち、スケルトンと切り結んだ。そのあいだにも後方から浄化魔法が飛び、アンデッドを消していくが、その間隔も次第に空気がちになる。

ロシュフォル教会の司祭たちも解放軍の者も、ふだん、これほどのアンデッドを相手にすることはない。それに彼女たちは騎士や剣士たちのように戦い慣れているわけでもないで、連続して魔法を唱えようとすぐに息が上がつてしまうのだった。

だが、息が上がるのはステイングも同様だった。スケルトンの数には足りがなく、彼はこんなに長く剣を振るつたことなどなかつたからだ。

「ボブソン、カリクスと交代し、息を整える。その隣ではデボネアもつかの間の休みを取っていた。」

「さすがですね、デボネア殿。わたしでは、あなたの半分も持ち堪えられない」

「だが君とボブソンのおかげで、わたしは休むことができる。わたしが戦っているあいだに君たちも休むといい」

「ですが疲れは溜まる一方です。このまま朝まで持ち堪えることができるのでしょうか？」

「我々が持ち堪えられなければ、町にスケルトンが侵入してくる。それでは南門や西門で戦っている皆に迷惑をかけることにもなる。ここは何が何でも死守しなければなるまい」

「そうよ、ステイング。私たちもいることを忘れてもらっては困るわ」

ユーリアがメラオースの首筋をなでながら言った。真つ先に東門が破られた時、防塞の前に陣取っていたドラゴンがスケルトンと戦ったのだ。もちろん、それでアンデッドの一体も倒されたわけでもないのだが、メラオースの怒りは激しく、急いで戻ったユーリアが止めなければ炎の息で防塞を焼き尽くしてしまっただけかもしれない。

「行きましょう、メラオース。一緒にこの町を守るのよ」

ユーリアに促されてドラゴンはスケルトンに襲いかかり、ボブソンが下がる。

残念なことに一度も戦ったことがないというケルマンの自警団の人びとは、この戦いではまったく当てにできなかった。ギルバルドには自警団も戦わせるよう言われていたが、彼らはアンデッドが侵入してくると誰よりも後ずさりしてしまうのだ。デボネアは騎士や剣士を戦場に連れていくことはできたが、戦ったこともないはずの素人は無理だ。

確かに彼らの力もなければ、解放軍だけでこの場をしのごうことは難しいだろう。だが彼らは容易に立つまい。騎士と市民との差は小さくないのだ。

「デボネア殿、時々、一回では浄化できないスケルトンがいますね」

「そうだな。あのようなスケルトンばかりだと手強いな。そうでなくても、こちらでも疲れている。だが手の打ちようがない。朝まで持ち堪えるんだ」

そこでデボネアは立ち上がった。

「ユーリア、ドラゴンでは長く持ち堪えられまい！わたしと交代して、ブラックドラゴンを連れてくる

「いい」

「ありがとう、デボネア！ そうさせてもらうわ」

ドラゴンは人間などに比べると無尽蔵とも思える体力を誇るが、さすがに次から次へと現われるアンデッドには手を焼いていた。メラオースが炎を吐いてもスケルトンはすぐに復活するし、亡霊や悪霊には素通りしてしまう。いくらユーリアの命令とはいえ、ドラゴンはすっかり及び腰になっていた。

ユーリアはドラゴンの善戦を褒めて、なだめた。しかし、さすがの彼女にも、もう一度、メラオースをアンデッドとの戦いに引っぱり出すのは困難そうだった。それでも彼女は南門に飛んでいった。

空はまだ暗く、湿原から現われるアンデッドは切れることがなかった。

南門を守っていたのはラウニイーとライアンの小隊だった。ところがここの防塞はフレアブラスの息に焼かれてなくなっており、壊された門を二頭のドラゴンが身体で塞いでいるような状況だった。

「どうしたのですか、ユーリア？」

ポリーシャIIプレージが近づいてきた。

「ギャネガーを借りていこうと思ったのだけど、こ

れでは難しそうね」

「そうですね。ここは破られて以来、ずっと二頭に任せきりです」

ラウニイーがオズリックスピアを手に立ち上がる。

「だったら私が行くわ。」

ライアン、かまわないでしょう？」

呼ばれた竜使いは肩をすくめてみせた。

「ドラゴンと並んで戦うなんて器用な真似は誰もできそうにねえし、かまわねえぜ」

「だけど本当に二頭だけで大丈夫なの？」

「いざつて時にはギャネガーを引っぱり込めてプロミオスに守らせる。こいつはアンデッドとも戦ったことがあるんだ。処し方は知ってるさ」

「ならばオーサとダイスンとオーウエルは西門に行つて。そちらも大変でしょうからね」

「承知しました」

「ポリーシャはここに残つて。何かあつたら西門のギルバルドのところへ行くのよ。いいわね？」

「はい」

それでラウニイーはユーリアと東門へ、オーサIIドリクスとダイスンIIテウルパン、オーウエルは西門に向かった。

オーサから事情を聞いたギルバルドはプロミオスの身を案じたが、ここはライアンに任せるしかなかった。

メラオースに替わつて東門の防衛についたラウニーはアンデッドと戦うことの困難さを初めて知つた。オズリックスピアの鋭い穂先も亡霊や悪霊にはまるで効き目が無いし、スケルトンも彼女の槍を恐れなからだ。

そんな心情を察したのか、デボネアからステイングと交代するように言われた時には、ラウニーは顔から火が出る思いだつた。

「無理は禁物です、ラウニー殿。夜はまだ長い。あなた一人ではないのですから、倒れるまで戦わないでください」

「本当、デボネア？」

「はい？」

「私はそんなにへこたれそうだったかしら？」

デボネアは微笑んだ。

親友との決別が彼を変えたとラウニーは思う。四天王だった時は末席だと陰口をたたかれ、一軍を率いる将としてはひ弱さも感じられたものだが、フィガロと死闘を繰り広げてからの彼には落ち着きと頼り甲斐

が備わつてきたように思える。

「そういうわけではないのですが、止めなければ、あなたはそうしていただいではなかったですか？」

「そんなこと、しないわ」

彼女はつぶやいた。

「ここで私が倒れたら、戦う者が一人、減つてしまふではないの。あなたたちに迷惑をかけてしまふわ」

「そうです。まだ夜明けまでそうとうあるでしょう。短絡的な思考では乗り切れません」

「でも私たちもこれで精一杯よ。ノルンたちだつて疲れているし、あなたはこの後も乗り切れると思つているの？」

「乗り切らなければ、わたしたちは死にます。我々、解放軍だけではなく、このケルーマンの町がアンデッドに呑み込まれてしまうのです。そんなことは、このデボネアの名にかけて防いでみせます」

そう言つて彼は立つていき、ボブソンと交代した。

ボブソンはすっかり疲れた様子で、ユリアにいたわられても応えることもできないようだった。しかし、それはステイングも似たようなものだったし、ラウニーもじきにそうなるだろう。そうなつてしまつたら、いくらデボネアでも一人では守りきれないはずだ。

だが彼の動きに衰えはなかった。デュランダルを振りかざし、スケルトンを打ち砕いていく。途切れがちになる浄化魔法も彼が戦う時には止められた。ノルンたちの疲労がそれほど酷いためだ。

アンデッドだけが変わらない。骨を鳴らして防塞を乗り越えてくる。何度デボネアに飛ばされても、やがて元の形をなし、ただ向かってくる。その流れだけは途切れることがない。まるでそれが荘厳な儀式であるかのようにアンデッドたちはひたすらに前進してくるのだった。

ラウニーはデボネアと交代してオズリックスピアを振るった。単体のスケルトンは決して手強い相手ではない。剣と盾で武装しているが、たいがいの剣は傍目にも刃こぼれしていることがわかるし、盾だつてかまえているだけで、一、二度たたかれれば簡単に壊れてしまう物も少なくない。彼らが恐ろしいのは集団としてだ。尽きることのない、その数ゆえにだ。そして倒しても倒しても、また蘇るためにだ。

ラウニーは己の恐怖を気づかせまいと思った。恐れは味方に伝染しやすい。そして敵を勢いづかせるからだ。自らの恐怖を打ち払うため、もう何体目になるのか数えてもいられないスケルトンを弾き飛ばした時、

彼女はオズリックスピアをかまえ直し、聖槍騎士の呪文を唱えた。

「嵐雲から出し雷獣よ、その鉤爪で、土地を引き裂かん、サンダーフレア！」

いくつもの電撃が防塞の向こう側に落ち、五体ばかりのスケルトンを一時的にでもなぎ倒した。

互いの骨を適当につけ合わせながらスケルトンはまた立ち上がったが、皆の眼差しに力が蘇るのをラウニーは不思議に思った。

「お見事です！」

ステイングにそう言われても、彼女には褒められる理由などない。ただ自分にできる精一杯のことをしただけだ。

「あなたが味方で心強い限りですよ」

「私がスケルトンを倒したわけではないわ」

「それはわたしたちも同じです。でも、いまのあなたは一度に五体ものスケルトンを打ち倒したではありませんか」

「一体だろうと五体だろうと倒してもいないものを褒められる覚えはないわね。それにグレッグもいるじゃない。こんなことができるのは私だけではないでしょう？」

呪文など唱えたのはほとんどやけくそだったのだとは言いづらくてラウニーが誤魔化そうとすると、当のグレッグⅡシェイクは真顔で彼女の言うことを否定してみせる。

「ですが、わたしはあなたのようにスケルトンと戦えません。そんなことが出来るのはあなただけです」
彼女は呆れたが、言葉は口をついて出た。

「だったら、ステイングやボブソンの後方から呪文を唱えればいいじゃない。あなたになら、それぐらいたやすいでしょう？」

「そうですね、わたしは役に立てないと思っただけです」

「馬鹿おつしやい。私のしたことを褒めておいて、どうしてあなたが役に立てないことがありますか。たとえ一時でもあなたがスケルトンを倒してくれたならステイングたちだってどれだけ助かるか考えてもごらん下さい。あなただけ戦わないなんて、この状況では許されることではないわ」

「申し訳ありません」

「ラウニー殿、よろしいですか？」

「なにかしら？」

振り返るとデボネアの周りに自警団の者たちが集

まっていた。彼らは皆、初心者でも扱いやすい四バス（約一二〇センチメートル）ほどの短槍を持っていたが実戦経験のある者は一人もいなかったはずだ。

「どうしたの？」

ラウニーが近づくと彼は困惑した顔で振り返った。
「いまのあなたの呪文に力づけられて、自分たちも戦わせてくれと言うのです」

「いいことだわ」

「ですが、彼らに教えている時間はありませんし、わたしは槍が苦手です」

ラウニーはステイングやボブソンを見たが、二人とも得物は剣で槍ではない。デボネアが苦手だと言う物をその二人が得意だとは思えなかった。しかし、デボネアが槍が苦手だという話も初耳だった。

かといって、せっかくやる気になったのを、教えられないと追い返す手もあるまい。

「わかったわ、私と一緒に戦いましょう。槍の基本は突きよ。一人で戦うことはないの、みんなで戦えば、ドラゴンだって止められるわ」

「本当でしょうか？」

「そうよ。さあ、槍をかまえない」

自警団の者は六人いて、全員、男性だが年齢はまち

まちだ。背も高い者もいれば低い者もいる。少し小太りの者もいるし、痩せた者もいた。丸い兜をかぶり、槍をかまえた姿勢もてんでばらばらだった。

それを見たラウニーはため息をつきたくなかったが、言い出した手前、ここでやめるわけにはいかない。彼女は彼らに槍の角度と持ち方と腰の入れ方を教えてやって、ひとまず四方八方を向いていた槍の穂先が揃った。

「かけ声に合わせて槍を動かしなさい。動きが揃ったら実戦に入るわよ」

ばらばらの顔が、この時だけは揃って嫌そうになつた。言い出してはみたが、まさか解放軍に受け入れられるとは思つてもいなかったのかもしれない。

しかしラウニーはかまわず自分からかけ声をかけて、槍を動かし、彼らにも真似をさせた。動きはばらばらで、かけ声も最初は小さかった。

けれど次第に声が出てきて、それで声が揃うようになると動きもようやく揃い出した。

そのあいだ、アンデッドの攻撃はデボネアたちにグレッグも加わつてしのいだが、スケルトンが防塞を壊して侵入しようとしていた。交代しながらとはいえ誰も一晩中、戦闘していた経験などない。終わることの

ない疲労がさすがのデボネアをも蝕みつつあった。

「デボネア、下がって!」

ラウニーと自警団の者がそろって前進する。彼女はかけ声に合わせて一斉に槍を突き出した。さんざん練習していたにもかかわらず、その動きはばらばらで、実際にアンデッドを前にしたことでも途切れがちになつた。

しかし、そのうちの一人の槍がスケルトンに命中した。彼らの表情が変わつたのはその時だ。

「いいわよ、その調子!」

すかさずラウニーが褒めると、次のかけ声が大きくなり、動きがまた揃い出した。その槍は次に防塞を乗り越えてきたスケルトンを近づけず、<RUBYCHARR="槍衾", "やりぶすま">となつて新たな防壁を築いた。自警団員の表情に自信が生じてくる。こうなればしめたものだ。

しかし、彼らにとつてはこれが初めての戦いである。彼女は早めに切り上げてステイングと交代した。

「お疲れ様、皆さん」

ユーリアが声をかけて、七人に水を配る。アンタリア大地で有翼人は珍しいらしく六人は彼女を凝視していたが、彼女に微笑み返されると何も言えないらしい。

「あまり水ばかり飲まないのよ、逆に疲れてしまうから。息を整えて、ゆっくり深呼吸をなさい。槍はこう持って、安易に座らない」

六人がラウニーに言われたとおりに動く。早く切り上げさせたこともあって誰も息を切らしていない。

「どう、初めて戦った感想は？」

「興奮しました」

いちばん年下っぽい若者が言う、ほかの五人が笑い声を上げた。

「何だよ、みんなだつてそうだろう？ 最初に当たるのが俺じゃなかったのは残念だけど自分でケルーマンを守ってるんだつて思うと、つい力が入ったよ」

「そうだな。リントンの言うとおりに、自分の町を守ってるって俺も実感したよ」

「そうだろう？」

それではかの四人も我先にと話し出したので、ラウニーは話の輪には加わらずに見守った。すると彼女の肩をたたく者があつたので振り返るとデボネアだ。

「さすがですね。正直なところ、わたしは彼らが戦力になるなんて考えてもいませんでした」

「あら、だから槍が苦手だなんて言つたのね？ 四天王にまでなつた人がおかしいと思つたわ」

「剣ほど得意でないことは本当ですがね。ですが彼らに教えている時間も惜しいと思つたものですから。あなたがいてくれて本当に助かりました」

「残念だけど、あまり褒められたような気はしないわね」

そこで彼女は声を潜めた。

「だけど私もいつまでも彼らにつき合うつもりはないわ。彼らは六人でもしょうがないでしょうけど私は一人で戦えるもの。あと数回、一緒に戦つたら、後は彼らだけで戦ってもらうわ」

「十分です。グレッグも加わつたおかげでステイングとボブソンが楽になつた。これなら今晚は持ち堪えられるでしょう」

「明日のことはどうなの？」

「わたしはそこまで楽観的ではありませんよ。それに、いまは今晚のことで手一杯です」

「あなたらしいわね」

それから最初も含めて三度、自警団とともに戦つたラウニーは彼らに四度目は手を貸さないと伝えた。

「私がいた分、場所が空いてしまうから、少し間隔を開けるといいわ」

「いきなり、できるでしょうか？」

彼女が外れると知って、六人はまた自信を喪失したような顔になる。

「大丈夫よ、あなたたちは三度、ここを守ったわ。私がいなくても、やることに違いはないのよ、もつと自信を持ちなさい」

「ですが、先ほどまではあなたが一緒に戦ってくれました」

「甘えるのもいい加減になさい！ あなたたちの槍は飾りですか？ あなたたちは何のために自警団に入ったのです？ 誰かを守りたいのなら、いつまでも私たちに甘えるのはよしなさい。大切な人をその手で守らなくて何の戦士です。ロシュフォル教会の方たちが独りで戦っているというのに、あなたたちは六人でも戦えないと言う。恥を知りなさい！」

思わぬ叱咤を受けて六人は揃ってうなだれたが、ラウニイーは彼らを睨みつけていた。

「ラウニイー殿、そろそろデボネア殿と交代していただけませんか？」

そこへステイングが声をかけたので、六人はまた顔を上げた。

「わかりました。私の後で彼らに守ってもらいます。あなたたちは休んでいてよろしい」

「承知しました」

彼女はオズリックスピアの石突きを地面に落とし、槍を持ち直した。どんなに疲れていても父から贈られたこの槍を手にする、彼女は新たな力が湧いてくるのを感じた。それは、こうして敵味方に分かれてしまったいまとなっても変わることはなくラウニイーに決して切れることのない父との絆を思い出させてくれる。あるいは父にとり、彼女がこのアンタリア大地で戦うことは意に背くことなのかもしれない。けれど、もう一度ヒカシュー大將軍に会える日まで彼女は戦い続けるだろう、たとえオズリックスピアを失ったとしても。

そして無限とも思えるアンデッドの群れもいつか途切れるのだ。明けない朝がないように。

「さあ、戦いなさい！ ケルーマンはあなたたちの町よ、あなたたちが守らなくて誰が守るというのですか？」

「はい！」

行くぞ、みんな！」

そう言っただけの五人を先導したのはリントンと呼ばれた若者であった。

同様の事態はギルバルドとマチルダの守る西門でも起きていた。こちらで自警団の勇気を引き出したのは同じ町のロシユフォル教会の女性たちで、彼らに指導したのはギルバルドだった。そのために彼はマーウォルスを前線から下げた。このレッドドラゴンは雌なのでメラオース同様あまり好戦的ではないのだ。

ギルバルドは自警団の者を三人一組にして侵入してくるアンデッドに当たらせた。

この方法には二つの利点があった。人数が少ない分、息を合わせるのがたやすく、ほかの者が少しでも多く休めることだ。しかし、六人で守るほどの威力はないので、スケルトンをなかなか下がらせられなかったが、防塞の上にとまってきたところに浄化魔法を放てば、もつと効率的にアンデッドを消滅させられた。

「よくやった！ 下がって交代しよう！」

「はい！」

自警団の者たちは息を切らせていたが、どの顔も上気して自信を得ていた。

「初戦でこれだけ戦えるなら十分だ。自信を持っていい、ケルーマンを守っているのは自分たちだと」

「あなたの指導のおかげです、ギルバルド殿。わたしたちが戦えるなんて思ってもいませんでした」

「感謝ならば、ロシユフォル教会の方たちにするといいだろう。真にアンデッドを消せるのは彼女たちだけなのだから。我々はアンデッドの侵入を防いでいるにすぎない」

「でもいままでは自分たちにそんなことができるなんて思いもしませんでした。その技を教えてください」

「あなたには感謝の言葉では足りないくらいです」

「安心するのはまだ早い。夜が明けて明日になり、アンデッドの数が減らなければ。だが今度は疲れても容易にやめることはできんぞ。我らも疲れているのだからな。おぬしたちは貴重な戦力だ」

「はい！」

しかも東門と西門には南門の自警団の者が半分ずつ加わり、東門の方もギルバルドのやり方に倣ったので、さらに余裕ができた。

それでギルバルドが南門へ行くと、ギャネガーはとつくに引っ込んでいて、プロミオスが一頭で守っていた。フレアブラスの身体はガルビア半島で進化した時のように激しい火の粉を帯びて、ライアンさえ容易に近づけなくなっていた。

ギルバルドが背後からのぞくと、プロミオスに近づいたスケルトンはまず盾が燃焼してしまっていた。斬

りつける偃月刀は無事だが、その柄も燃え出す始末で、プロミオスを中心に十バス（約三メートル）ほどの範囲が危険地帯なのだと言う。

「いったい何があったのだ、ライアン？」

「見てのとおりだ。アンデッドに斬りつけられて手がつけられなくなった。あいつらがいなくなるまで収まらねえだろう」

「火事になったら、どうする？」

「防塞なら、とつくにプロミオスが片づけちゃったし門もスケルトンと一緒に焼いた。燃やしそうな物は遠ざけてもらったし飛び火した時のために樽に水も汲み取った。あとはプロミオスの体力がどれだけでもつかだけ心配だ」

「もちそうなのか？ アンデッドに門を破られてから、ずっとああしているのだろう？」

「俺の見たところでは今日は大丈夫だろう。それ、やまねこ座が昇ってきてる。ぼちぼち夜が明けるぜ」

「だが明日の守りはどうする？」

「プロミオスは引つ込めてギヤネガーとマウオルスを使う。東門と西門にまわした自警団の奴らとかも戻してくれればいい」

「アンデッドが減つてくれればいいのだがな」

けれど、二人がそんな話をして間もなくライアンの言ったとおりに東の空が次第に明るくなり始め、誰もが待ち望んだ朝が近づいていることを教えた。

そうと気づいたアンデッドたちも、いつまでもとどまっていた。空が白々となるにつれ、その群れは後ずさりし、ダーイクンデュー湿原に呑み込まれていった。

やがて曙光が差し込んできた時、アンデッドはケルーマンの近くには一体も残っていなかった。彼らは町を守りきったのである。

海竜の月一日、夜明けとともにグランデューナたちはカンダハルに向かった。広大なダーイクンデュー湿原はここで終わる。町の南側にはアンタリア大地では一部の地域でしか見られない乾いた草原が広がり、そのずっと南には広くて高いバルヴァーン山脈が東西に長く延びていた。ここがゼテギネア大陸の最南端となるのである。

アラデイの報告どおり、カンダハルは闇に覆われていた。周囲を街壁に囲われているところはほかの都市と違いはないが、有象無象のスケルトンが町中を歩き回っているのが異常な光景だ。

「カンダハルの神殿はどこにある？」

「町の中央に広場があつて、その真ん中だ。二階建てのそれほど大きな建物ではない。祭壇は北方、カオスゲートの方を向いている」

「カノープス！ 神殿の様子が見えるか？」

「こう暗くちゃ、わからねえな！ エレボスとなら偵察に行つてもいいぞ！」

「わかつた！ 一度、下りよう！」

それでカノープスがエレボスを飛ばして、カンダハルの上空を一回りしてきた。その翼には亡霊も悪霊も追いつけないが、カノープスの視力もあつての技だ。

「どうだった？」

「入り口は南側だ。入つてすぐの両脇に十階建ての塔があつて、その北側が会堂だな。奥行きは入り口から七〇バス（約二〇メートル）ぐらいだと思うが、会堂の高さも同じくらいある。会堂の屋根は傾斜がきつくて、グリフォンを着地させるのは難しいな」

「進入路は入り口だけではあるまい？」

「塔にも会堂にも窓があつた。ただ、着色硝子じゃなくて、どれも真つ黒だったように見えたな」

「では中の様子は見えなかつたのだな？」

「無理無理。亡霊や悪霊に見つかつて大急ぎで逃げ

てきたんだ。中なんか拝んでる暇があるかい」

カノープスの報告を聞きながら、グランディーナは神殿の見取り図を地面に描いた。

「建物の周囲は広場だそうだが？」

「そこもスケルトンでいっぱいだ。当然、そいつらを片づけないと神殿の入り口は使えねえ」

グランディーナが祭壇のある北側に印をつけた。

「この着色硝子の大きさは？」

「言うと思つたぜ。全部割れば、グリフォンで通れるだろう。エレボスは特別大きいが一頭ずつなら大丈夫だ」

「ならば、こうしよう」

彼女が招いたので、九人は図の周りに集まつた。

「まずグリフォンで神殿に近づく。ランスロットはアイーシャと、チャールスはレイカと同乗して二人を亡霊や悪霊から守ること。」

カノープスとケビンはこの着色硝子を割れ。

そこでサンダースが〈光のさざやき〉を使う。

私はカノープス、サラディンはケビンと同乗する。

硝子を割つたら神殿に入る。オミクロンもユーシスも祭壇の近くにいろだろう。後は臨機応変に動いてもらおう」

「近づくまでの亡霊と悪霊はどうします？」

「アイーシャとレイカに任せる」

「また〈闇の香り〉を使われたら、どうするのだ？」

「光のささやき〉は一つしか使わない。オミクロンが〈闇の香り〉を使うまでの場つなぎだ。大した効果はもとより期待していない」

「中にもアンデッドがいるだろう。オミクロン殿が祭壇の近くにいなかったら、どうする気だ？」

「神殿の構造から見ても、ほかにいそうなところは塔だけだ。だが塔の部屋は狭い。ここでアンデッドを生み出すのは効率が悪くないか？」

話を返されてサラデインが頷いた。

「神殿の幅から考えて塔の各部屋は十バス（約三メートル）足らずしかあるまい。アンデッドを作るには人間が要る。それを置くにはあまり向かないな」

「しかしそれなら、オミクロンはそんなにたくさん死体をどこから持つてきているんだ？」

「アンデッドを作るのに死体である必要はないのだ。活甕に動いていなければ生きている人間から作ることもできる。おそらくカンダハルにいた者が犠牲になっているのだろう。墓もあつたらうしな。それに加えて来た時に持つてきた可能性も捨てきれない」

ケビンが激しく歯ぎしりをする。オミクロンに対する怒りは彼のなかで頂点に達しそうだ。

「悪いが、もう一つ確認させてくれ。もしもこの着色硝子を割れなかったらどうする？」

「光を防ぐためにも裏から板で補強してある可能性もあるか。」

グリフオンの体当たりではどうだ？」

「一度に一頭しかできねえぞ。エレボスなら、やらせてみなけりやわからねえが、蹴飛ばすのとどつちがいいかな？」

「その時はグリフオンよりも魔法を使った方がいいだろう。わたしがファイアウォールを唱える。サンダース、そなたがアイスフィールドを唱えてくれ」

「わかりました」

「それでもまだ侵入できないのなら、もう一度ファイアウォールを使えばいいだろう」

「そうしよう。私とカノープスがエレボス、サラデインとケビンがピテュス、ランスロットとアイーシャがメモピス、チャールスとレイカがシューメイ、フォーゲルとサンダースがピタネだ。アンデッドにはあまりかまうな。オミクロンを倒し、ユーシスを助け出したら、ここに用はない」

「了解！」

グランディーナがサンダースに「光のささやき」を渡して、各々がグリフォンに乗り込んだ。

「行くぞ！」

エレボスを先頭にグリフォンが飛び立つ。カンダハルの上空にさしかかると、急に周囲が暗くなった。それでも周辺の陽の光があるから、外から見た時ほど真つ暗ではなく、町の中央にあるという広場も、そこにある神殿も判別がつくほどの明るさは残っている。

グリフォンは通常、高度三〇〇バス（約九〇メートル）以上を飛ぶ。亡霊や悪霊は浮遊するのであって飛行するわけではないから、ふつう、両者はすれ違わないで済む。

神殿の屋根の上には、亡霊も悪霊もいなかった。ただカノープスが報せたとおり、急な三角屋根はグリフォンも人も乗っているには向かない。

「やるぞ！」

カノープスの合図でケビンが構えた槍の石突きを力一杯、着色硝子にたたきつけた。反対側をカノープスの鎧が殴り、硝子は派手な音を立てて全壊した。

と同時にサンダースが「光のささやき」を使ったので辺りの闇が一斉に払われて、カンダハルの上空は本

来の明るさを取り戻した。

それよりも早くエレボスとピテュスが続いて神殿の中に飛び込んだ。

エレボスが突つ込むなり、グランディーナは飛び降り、大上段からオミクロンに斬りかかったが、すんでのところでは避けられた。

「我々は解放軍だ！ オミクロン、覚悟！」

「愚か者め！ わしのかわいいアンデッドに貴様らがかなうと思つたか?！」

「おうよ！」

ケビンもグリフォンを降りるなり、群がってきたスケルトンを力任せになぎ払った。

「我が名はケビンⅡワルド、ホーライ王国騎士団の名誉にかけて、貴様の裏切りは許さんぞ！」

「ホーライ王国だと？ ラシュディさまのたつた二度の禁呪で壊滅した国の生き残りが何をほざく！ 貴様もアンデッドにしてやろう、わしの術でなら楽に死ぬるぞ！」

「ふざけるなっ!!」

二人にさらにスケルトンが群がった。

ケビンは槍を振り回して、これを振り払ったが、大した打撃は与えられない。

そのあいだにもオミクロンはアンデッドに守られ、神殿の中央に後退していく。そして彼が再び「闇の香り」を使ったのだろう。明るさがまた失せていった。

「ケビン、離れていろ！」

だがグランディーナの手中には聖剣ブリュンヒルドがある。振り上げた剣を目にも止まらぬ速さで振り下ろすと、鎌鼬かまいたちは淡い緑色の光を帯びてアンデッドを一網打尽になぎ払っていった。

それはぎりぎりオミクロンに届かなかったが、その前にできた空きにケビンが突進する。

「諸々の悪しき霊よ、我に楯突く愚か者を討ち滅ぼせ、ダーククエスト!!」

「うおおおっ?！」

だがオミクロンの魔法をもらに受けて、さすがのケビンも足を止めた。その隙にアンデッドが空きを埋めてしまい、三度、彼の周りに群がった。

グランディーナがケビンを助けに入ったが、ブリュンヒルド一振りでこれをしのぐには、さすがの彼女もシングルで力を使いすぎていた。

「聖なる父ファイラーハの慈悲深き御名において命ずる。汝、迷える霊よ、この世のくびきより放たれよ。安らぎを知らぬ魂よ、所在の処に還れ！」

浄化魔法の光が神殿内に拡がった。アイーシャとレイカが同時に唱えたので、相乗効果を起こしたのだ。

それはケビンの周囲のアンデッドを消滅させた。それでもまだオミクロンとのあいだを遮るスケルトンをグランディーナが片づける。

「かたじけない、皆の衆！」

ケビンの突進にオミクロンが再び魔法を唱えようとしたがサラディンがわずかに先んじた。

「回れ回れ、風よ、回れ、渦となれ、トルネード!」
「何だと?！」

足止めをされたオミクロンをケビンの槍が確実に捉えた。穂先は死霊術師を貫き、彼は槍ごと掲げられた。

「オミクロン、討ち取つたり!」

「馬鹿な、貴様らなどに——」

「そんなものはさつさと棄てろ!」
グランディーナとカノープスはケビンをエレボスに無理矢理乗せた。

それから彼女はピテウスに乗り、いままで見向きもしなかつたユースに近づいた。

天使長は祭壇の上に立てられた十字架に逆さに磔はりつけされている。手足から血を流し力なく首を垂れていたが、グランディーナが手を伸ばすと突然、跳ね起きた。

「触るのではありません、汚らわしい！」

「うるさい、黙っている。こんなアンデッドだらけの場所にいつまでもいられるか」

「人ごときが私に触れるのではありません！」

ユーシスはなお、そう言ってもがいたが血が流れるばかりで手と足を止めた釘は容易に外れなかった。

結局、フォーゲルが三ヶ所の釘を抜きユーシスをピタネに乗せた。一行はやつと神殿を離れカンダハルの郊外に着陸した。

「フォーゲルさま！」

「大丈夫ですか、ユーシス殿？」

「フォーゲルさまこそ、なぜこのようなところにおいでなのですか？ まさか天界で良からぬことが起きたのでしょうか？」

「話せば長くなりますが、まずはあなたを捜すためです。ですが酷い傷だ。あなたをこのように扱うとはオミクロンという男、神をも恐れぬ輩と見える」

しかし彼女がその身を浮かせると、すぐに玉のような肌の輝きを取り戻した。天使には怪我さえも一時的なことに過ぎないらしい。

「大したことではありません。私の力がアンデッドを作り出すのに使われたことに比べれば、このような

傷など、その報いと言つてもいいでしょう。それよりもフォーゲルさま、ミザール姉様を助けるのを手伝ってはくだいませんか？」

「ミザール殿は墮天したのではありませんか？ いくらミザール殿とはいえ、ファイラーハが一度、決めた墮天を取り消すとは思えませんか？」

「いいえ、そんなはずはありません！ ミザール姉様がキャターズアイを返せば、ファイラーハさまはきつと墮天を解いてくださるはずです。天使長になった私がいまだスローンズなのはその証、ミザール姉様がキャターズアイを手放さないうちに急がなくてはなりません」

「ラシュデイがミザールにキャターズアイを持たせたままだとは思えない。姉を助けたがるあなたの気持ちはわからないではないが、事態はそんな樂觀視できるようなものではないと思う」

「人間風情が口を挟むことではありません！ あなたたちは私をミザール姉様のところに連れていけばいいのです。」

一緒に来ていただけますね、フォーゲルさま？」

「その話はこれからバーミヤンに戻るまでのあいだにするといたしましょう。まずは暗くなる前にここか

ら離れなければ」

「ええ、わかりました」

しかし二人がグリフォンに乗る間もなく、グランディーナが声をかける。

「フォーゲル、先に帰りたければピタネに乗っていい。私たちはもう一仕事ある」

「なぜ、あなたに命令されなければなりませんか？ フォーゲルさまがいらつしやるのです。その命に従いなさい」

「ユース殿、この者たちのリーダーは彼女です、俺ではない。このグリフォンも解放軍に所属しているのです。」

それで一仕事とは何だ？ オミクロンを倒して終わったのではなかったのか？

「カンダハルに生存者がいるかもしれない。その確認をしないうちは離れるわけにはいかない」

「どうやって探すの？ カンダハルは大きな町ではないが、あのようにアンデッドがうろついているのは明日になるまで待たねばなるまい」

「〈光のささやき〉を使えば〈闇の香り〉の効果は打ち消せる。皆で手分けすれば、町中を捜せるだろう」
「ならば、すぐに始めた方がいい。日が暮ればア

ンデッドがまた活発に動き出す。だが生存者が残っているとは思わな

「わたしがグランディーナ殿にお頼み申したのです。方が一を思うと、このまま去るわけにはいきません」

「謝る必要はねえぞ、ケビン。」

さあ、〈光のささやき〉があるならとつと使っちゃえよ！ その方がアンデッドも早くいなくならあ」

「そうだな」

〈光のささやき〉は小さな布の袋に入れられていた。カンダハルの上空でグランディーナがそれを振りまくと、辺りの闇が消え、昼の明るさを取り戻した。

地上を我が物顔で闊歩^{かほ}していたアンデッドたちは闇を求めて地面や地下に逃げ込み、一行の探索を容易にさせた。だが、日暮れまで時間いっぱい行われた探索は、逆にこの町に生存者が一人も残っていないことを裏づけただけだった。フォーゲルまで手伝って彼らは地下室をものぞいたが、カンダハルに生きている者は残っていないかった。

「急いで北の島に渡るぞ。アンデッドが動き出している。」

カノープス、あなたがアイーシャ、レイカとエレボスに乗ってくれ」

「俺だけ鞍なしかよ？」

「万が一、落ちてても、あなたなら飛べるだろう」

「へいへい」

「すみません、カノープス」

「気にするな、どうせ一人あぶれるんだ。アヴァロン島に行った時にユーリアがやったことを覚えていたんだろう」

そのあいだ、ユーシスはずっと皆を睨みつけていたが、何も言うことはなかった。

こうしてグランデイナーたちはカンダハルを離れた。しかし、オミクロンが倒された後にも変わることなく現われるアンデッドを見ると、たとえようもない疲労感が彼らを包むのだった。

海竜の月二日未明、アンデッドの攻撃がやむことはなく、解放軍からはプロミオスとメラオースが戦線を離脱するという事態もあつて、ギルバルドは各門を守る人員を次のように決めた。

東門は引き続きデボネアの小隊が守ることになった。西門にマチルダ、南門にラウニイーという配置も昨晩と同じだ。ライアンも引き続き南門だったが、ギヤネガートとマーウォルスを使う。

さらに三つの門に自警団が六人ずつついて、昨晩と同じく、三人一組となつて防衛に当たる。それに加えて、北門にいた自警団の者も東門と西門に分けて配置され、三人の影も各門に一人ずつ加わつた。残つたギルバルドとユーリア、プロミオス、メラオースが北門に廻つた。

「北門は君たちだけで大丈夫か？」

「アラデイの話では破られる恐れはなさそうだ。こちらに廻ってくるアンデッドはさらに北上するのだろう。危険なのはむしろケルーマンよりもバーミヤンなのかもしれない」

「だが、あちらにはガーデイナーたちのほかに天空の三騎士殿がお二人もいるだろう？ このような非常事態だ、当てにできないかな？」

「だといいがな。だが、いまはバーミヤンのことよりもケルーマンの守りに専念しよう」

「皆、一昨昨日さきおとといからの戦いで疲れている。守りきれるところ思っているのか？」

「そうしなければ我々はここで倒れる。諦めるわけにはいかないだろう？」

「わたしは精神論ではなくて君がそう言う根拠を訊いているのだがね」

しかしデボネアの意に反してギルバルドは呵々^かと笑い返した。

「なんの、こんな時には精神論だつて、そう捨てたものでもないさ」

デボネアが反論しようとする、アンデッドの襲来を告げるロシユフォル教会の鐘が鳴り響いたので、それ以上、話を続けるわけにはいなくなつた。彼はギルバルドと別れて急いで東門へ走つていったのだつた。

果たして、戦局はデボネアの家じたとおりとなつた。昨日の疲れが誰も取れていない状態で、自然と怪我人が増えた。

司祭たちは、解放軍の者もロシユフォル教会の者もすつかり喉をからして、呪文を唱えることもままならない。

ラウニーの手には慣れたはずのオズリックスピアが重たかつた。

ライアンにもギャナガーとマーウォルスを何度も戦場に引つ張り出すことは難しかった。二頭は尽きることのないアンデッドとの戦いに飽きている。だが今晩は満身創痍のプロミオスを使うわけにはいかない。

デボネアも苦戦していた。ステイングたちの疲労が

濃いと思うと、つい自分の担当している時間が長くなつてしまふからだ。

ケルーマンの自警団も慣れたとはいへ、調子に乗つて任せるのは危険だ。

解放軍の誰もがいよいよ自分たちが八方塞がりの状態に陥りつつあることを悟つた。グランディーナたちは今夜中にケルーマンに着くことはないだろう。スラストとフェンリルもバーミヤンを離れることはあるまい。助けは来ないのだ。ケルーマンにいる者たちは自分たち自身の力で、この困難を乗り越えなければならなかつた。叱咤も激励も、いまの彼らには空しく響くだけだろう。

「ギルバルドさま、何だか大勢の人たちがいらつしやいましたわ」

ユーリアに促されて、彼がそちらを見ると確かに棒切れを持った大勢の女性がギルバルドたちの守る北門にやつてくるところだつた。その年齢は老いも若きも様々で、手にした棒切れもめん棒だつたり、薪だつたりとまちまちだつた。前掛けをした女性もいれば、乳飲み子を背負つた女性もいる。ただ彼女らに共通していたのは眼差しだつた。強い意志を感じさせる視線だが彼女らに共通しているものだつた。

「このような時間にいかがでした？」

ギルバルドが近づいていくと、数人の女性が進み出た。身なりの良さからケルーマンでも名士の妻たちと思われたが彼女たちが起きている時間でもないことは明らかだ。

「私たちはあなたたちの手伝いをさせていただきましたと思つてうかがいました。町がこのような時にこれ以上、私たちが傍観したままでは許されないのでしよう。私たちも一緒に戦わせてください」

「相手はアンデッドだ。見たところ武器と思しき物は持つているようだがアンデッドには効果はあるまい。志はありがたいがアンデッドと戦うことはできなからう。お引き取り願おう」

「それではおうかがいしますが、あなたたち解放軍の方々はアンデッドに効果的な武器をお持ちなのですか？ いえ、ケルーマンの自警団の方たちでもかまいません。あなたたちにはアンデッドに通用する武器があるのですか？」

「そうではない。残念ながらアンデッドに効果のある武器はここには一つもないのだ。我々にできることはアンデッドがケルーマンに入らぬように守り、ロシユフオル教会の方々に浄化してもらうだけだ」

「でしたら、私たちにもできることはありません。お願いです。町の者でもない、あなたたちが戦つているのに私たちが見ているだけなんてできません。どうか手伝わせてください」

「なぜ女性しかいないのか訊いてもよろしいか？」
「男たちが立ち上がらないからです。彼らはあなたたちと自警団に任せたきり動こうとしません。ですがケルーマンは私たちの町です。町を守るのに、いつまでもあなたたちに頼つてばかりいられません」

すると彼女たちの後方が騒がしくなつて、女性たちをかき分けるようにして男たちが現われた。彼らは手に何も持つておらず、女性たちがこんな時間に町を守るためと言つて出かけてきたことを、ついさつき聞きつけて慌てて起き出してきたような風だった。

「帰るんだ、ブレンダ。武器を持つたこともないのに、おまえたちがケルーマンをどうして守ろうと云うのだ？ この方たちは忙しいのだ、おまえたちが邪魔してはいかん」

そう言つた男はケルーマンの町長だった。彼が手をつかんだ女性は妻なのだろう。しかし彼は、すぐにその手を振りほどかれた。

「もうあなたたちの言いなりにはなりません。ケ

ルーマンは私たちの町なのですよ？ 自分たちの町を自分たちで守ろうとして何が悪いのです？」

「何を言うのだ。そのために自警団を結成したのではないか。おまえたちの出る幕ではない」

「自警団の人たちについては確かにあなたの仰るとおりでしょう。ですが、この方たちはケルーマンとは何の関係もないではありませんか」

「だが彼らは解放軍だ。このアンデッドがゼテギネア帝国の仕業ならば、帝国と戦う解放軍が対処するのが当然ではないか」

「なんて情けない！」

その言葉をきつかけに女性たちから非難の声が沸き上がり、男たちを責め立てた。彼らはそんなことを言われるのがギルバルドのせいであるかのように恨めしそうな視線を向けた。

「あなたたちはそうやってロシユフオル教会の方たちにも頼り切るつもりなのね。だけどアンデッドが出るようになって何日経ちましたか？ 皆さんが疲れて戦っているというのに、どうしてそれを見ているだけなんてことができるのです？」

「我々は戦士ではない。どうしてアンデッドと戦えるなどと思うのだ？」

「私たちも戦ったことなどありません。ですが、これ以上、何もしないでいることなどできません。いいのです、あなたたちが戦わなくても。私たちが戦うと言っているのです」

「そんなことをさせられるわけがない！」

「あなたたちが戦わないと言うのですから私たちが戦います。ケルーマンの町は解放軍の方々や自警団の方たちとともに私たちが守って見せます。」

「さあ、あなたが解放軍のリーダーなのでしょ？ 私たちに指示をしてください」

「そんな勝手なことは許さんぞ！」

男たちは力づくで女性たちを止めようとしたが、彼女たちがめん棒やら薪やらを振り回したので手を出すことができなかつた。

「ならば、あなたたちにもともに戦ってくれとお願いしよう。だが手伝いなどとは思わないでほしい。戦う以上、あなたたちも立派な戦力だ。だが、まずはこちらへ来てくれ。いくらなんでもめん棒で戦うわけはいかない」

「ありがとうございます」

「待ちなさい、ブレンダ」

町長がギルバルドとその妻のあいだに割って入った。

「おまえを戦わせるくらいなら、わたしが戦おう。それに赤子を背負った者までいるではないか。」

ギルバルド殿、まさか、あなたはこのような女性にまで戦えとは言いますまいな？」

「何人かの方たちには気持ちだけいただいてお断りするつもりだった。だが、このような事態にあつて男性も女性もあるまい。我らの解放軍にも戦う女性はいり。大事なものは戦うという意志だ」

その言葉に女性たちが歓声を上げ、拍手さえわき起こつた。ここにきて重い腰だつた男たちも、ようやく町を守るといふ意志を明らかにした。

ギルバルドは彼ら彼女らをまず南門に連れていつた。ありつたけの短槍と、同じ長さの棒が持ち寄られ、六人一組になつて、昨晚、自警団に施したのと同じ訓練がなされた。

女性たちは男たちよりも声を上げ、実際に町を襲わんとするアンデッドを見ても容易なことでは怯まなかつた。赤ん坊を背負つた若い母親や年寄りも帰されたが、それでも半数近くの女性と大勢の男たちが残り、町の守りについた。

やがて彼女たちは三手に分かれて、順に前線に立つた。いまや、ケルーマンの町に眠っている者は少な

かつた。解放軍とロシユフォル教会と自警団に守られるままだつた人びとが自らを守るために立ち上がったのだ。老若男女の別なく人びとは短槍や棒を振るい、アンデッドを押し返した。

幸いなことにアンデッドの数は減つてきていた。

グーイクンデイー湿原を北上してきたアンデッドの群れが絶えることは、それを生み出したオミクロンが倒されたことを意味している。

そうと知つてギルバルドは安堵し、皆にもそのことを伝えたのだつた。

「グランデイーナ、わたしはバーミヤンに戻つたら、スルスとフェンリルと合流してアンタンジルに行く。天使とおぬしたちを連れていくわけにはいかないが、サラディンにとともに来てもらいたい。おぬしたちはユーシス殿に従つて、バルハラに向かつてくれ」

「バーミヤンに戻るのはいいが、カオスゲートのある島までどうやって行くつもりだ？ グリフォンも必要だろうか？」

「そうだな。だがアンタンジルにグリフォンを連れていく必要はない。カオスゲートの付近で待たせておくことはできるか？」

「カノープス！」

彼女が呼ぶとバルタンはすぐに飛んで飛んできたが、同じ問いを繰り返したフォーゲルには首を振った。

「誰かいねえと無理だろう。自分の面倒は自分で診るが、奴らにとつちや残りたい理由はねえからな」

「ならば誰か一人、ともに行かせないと駄目だな」

「何の話だ、いったい？ 俺がギルバルドと一緒に行くってわけにはいかねえのか？」

「バーミヤンに戻ったら話す」

そう言つて、彼女はカノープスを追い払った。

「ユーシスがバルハラに行きたがるのに、なぜ私たちがつき合わなければならぬ理由がある？ 天使長が何をしようと私の知ったことではない」

「バルハラにいるのはミザール殿だけではないからだ。ラシュディと契約を交わし求められるままに天使を召喚しよう。それにゼテギネア帝国の者がともにいる可能性も高かるう？」

「なるほど。どちらにしてもバルハラは旧ホーライ王国の王都だったところだ。放つておいていいはずはなかったな。あなたたちはバルハラに行く気はないのか？」

「ミザール殿に会いたいし、おぬしから目を離すの

も不安が残るが、そうすると話がややこしくなる。

ユーシス殿はバルハラに急ぎたいだろうが、我々はせっかくアンタリア大地に来たのだ、アンタンジルとガルフのことを先に片づけたい。グリフォンがあるとはいえ、慣れない地上で行つたり来たりしたくもないのでな。それに我々がミザール殿に会つたところでもはやできることはなかるう。ファイラーハがいままで天使長を墮天させたことは一度もなかったのだ、たとえキヤターズアイが天界に取り戻されたとしても、ミザール殿の墮天が取り消されることも再び天界に迎え入れられることもあるまい」

そう言うと、フォーゲルはユーシスの方に目をやった。彼女はカンダハルで助け出されてから、ほとんどのあいだ視線を北の方に向け、フォーゲル以外の者と話すこともなかった。バルハラはアンタリア大地からずっと北だ。肉体を得て地上に降りたユーシスには、その距離は天界よりもっと遠くに感じられているのかもしれない。

海竜の月四日、解放軍の本隊はケルーマンを発ち、その日のうちにバーミヤンでグランディーナたちと合流した。

アンデッドの襲撃は町の者で対処できるほどに激減していたし、二晩戦ったことで人びとは自信をつけた。アンデッドの数も以前のように減るのは時間の問題と思われた。

デボネアが案じたバーミヤンを襲ったアンデッドはケルーマンほどの数には至らず、天空の騎士二人とガーディナーたち、それにロシュフォル教会の司祭たちの協力で事なきを得ていた。

「私たちは次にバルハラへ向かう。天宮シャングリラでミザールの名において私たちを襲ってきた天使や当のミザールがそこにいるからだ。それに都市の機能を失ったとはいえバルハラは旧ホーライ王国の王都だ。遅くなったが、この地の奪還はまだ解放軍に参加していない者、旧ホーライ王国の旧臣たちに強く呼びかける効果もあるう。ただし、サラディンとユーリア、天空の三騎士の五人はグリフォンとともにアンタリア大地に残り、アンタンジルに向かってガルフを片づける。我々は明日の船でガルビア半島に戻り、バルハラを目指す。今日はよく休め！」

こうして解放軍はアンタリア大地での戦いを終え、

バルハラに向かった。

二四年前の戦争でラシュデイの放った禁呪のために永久凍土とも揶揄される、かつての王都をいま墮天使ミザールが支配する。

氷土に散るのは解放軍か墮天使か。
新たな戦いが始まろうとしていた。

「聖なる父の御名において、墮ちたる者ここに断罪せん。聖なる父よ、この者の罪と、あなたの下で新たに徳を積むことを許したまえ」

その言葉とともにまるで砂の像のように天使たちの姿は崩れ、霧散した。

ユーシスが息を吐き、十字架を下ろす。バルハラに入ってから、彼女に断罪された天使は数十にのぼる。それがなぜかは言わないが、グランディーナはもとより同じスローンズのエインセルにも手を出させないのは、彼女が天使長だからという特別な理由があるからに違いなかった。

けれど、そのために彼女たちの歩みは遅かった。前の天使長ミザールの名の下に召喚された天使たちと、まるでユーシスを追ってくるかのように、ひっきりなしに遭遇しているからだ。

もつとも、バルハラにいる帝国軍は天使ばかりではない。人間が相手の時は解放軍が対処するのだが、それも大した数ではなかった。グランディーナはガルビア半島への遠征からこちら、三ヶ月も一緒に行動してきたほとんどの部隊をアラムートの城塞に戻したのだった。

残つたのは彼女と行動をとるにずるランスロット、カノープス、アイーシャ、それに構成員を改めたケビン率いる小隊と、カリナーストレイカーが連れてきた二頭のコカトリス、補給部隊のフレドールケフェンフラーだけだった。

フォーゲルら天空の三騎士とサラディン、ユーリア、さらに五頭のグリフォンはアンタリア大地で別行動をとり、アンタンジルへ向かっていた。カオスゲートを開く必要があるので聖剣ブリュンヒルドもそちらだ。

バルハラは二四年前の大戦でラシユデイが禁呪を使ったので、ガルビア半島同様、年中吹雪いている。それもバルハラ城に近づくほどひどく、ウィルクスランドのような辺境になると雪がちらつく程度になるのだ。その程度でも本来の穏やかな気候からの変化は激しく、旧ホーライ王国の首都とは思えないほど衰退していた。

禁呪が使われたことがあったのでランスロットはガルビア半島のようにグランディーナの古傷が痛むことを案じたが、彼女の返答は「大丈夫だ」の一点張り、現に帝国兵と戦うこともあるほどだった。

そして彼女はユーシスに率いられてウィルクスランドから一路北上してバルハラ城を目指していた。ラシユデイを愛し、魔石キャターズアイを盗み出した咎で墮天させられた前の天使長ミザールに会うために。

「今日はここで休みます。用意をしなさい」

ユーシスの言葉にグランディーナが頷いて皆を振り返った。

仲を取り持つ天空の三騎士が不在なので、天使たちの高圧的な態度が案じられていたが、彼女たちは話し相手をグランディーナ一人にしぼり、天使たちの方もエインセルたちに口出しをさせないという取り決めができていたので、皆はアンタリア大地に向かった時ほどの不快さは覚えずに済んでいた。

天使たちはやはり眠りもせず食事もしなかったが、ユーシスが一人で天使を断罪することに疲労も覚えるらしく、夕方頃になると休むと言い出したことも解放軍には好都合であった。

その一方でユーシスは町に寄りたがることはなかった。グランディーナが影に手を回させているのか、人びとが新たな天使長に目通りを願ひ出ても、ごく消極的な対応しか取りたがらないほどだ。

しかし彼らは突然バルハラに現れた大勢の天使たちに驚き、戸惑っていた。神話、あるいはお伽噺の中の存在が自分たちの世界に踏み込んできたのだ。解放軍には大いに理解できる感情である。

しかも一方がゼテギネア帝国、もう一方が解放軍について戦っているとなれば、さらに迷うのも無理はない。だが聞けば、ミザールはバルハラ城に閉じ籠もり、人びとの前に現れることはないし、彼女の名の下に召喚された天使たちも人目に触れることはほとんどないらしい。

自ら出向くことをしないとはいえ、ユーシスは訪れた人びとに会うことは拒まなかつたし、天使長の名において、彼らに祝福を与えるのだから、その違いは明らかであった。

そして二四年前は従騎士に過ぎなかつたとはいえ、旧ホーライ王国騎士団の生き残りで固めたケビンの小隊の存在も、ゼテギネア帝国に対して解放軍の正当性を裏づけるのに役立つていた。

それほど禁呪の影響はバルハラの人びとを苦しめていた。ゼテギネア大陸のほぼ中央に位置し、大商業都市マラノにも近い旧ホーライ王国の首都は、激変した気候のためにかつての賑やかさを失い、人口も往事の十分の一に減ってしまったのだ。

いまのバルハラには自分たちが生きていける産業もない。食料はほかの地域から運んでこなければならぬし、ほかにめぼしい特産品もないからだ。

切れることなく降り続ける雪が人びとの生活を根底から崩してしまった。だからこそ、このような状況をもたらしたラシュデイとゼテギネア帝国への恨みは深い。これに対する帝国の答えが、徹底した弾圧だったことも人びとの感情の悪化に拍車をかけていた。

バルハラ解放は、旧ホーライ王国の首都だったとは思えないほど順調だった。バルハラがゼテギネア帝国にはもはや何の価値もないことの証でもあろうが、解放軍には意味がある。バルハラ解放が済めば、ゼテギネア大陸の東半分が帝国の支配下から脱したことになるからだ。

海竜の月二三日、ユーシスたちと解放軍はバルハラ城を望むところまで接近した。

もはや彼女たちの上空を天使たちが舞うことはない。そこに残るのはわずかなゼテギネア帝国兵とミザールだけだ。

まるで氷のように表情を変えないことなく、来る日も来る日も天使たちを断罪し続けたユーシスは、ここに来て初めて愁いを帯びた様子を見せた。

「あの城には明日、向かいます」

彼女の言葉にグランディーナは皆に野営地を設置するよう合図した。

吹雪はこの辺りがいちばん酷く、都市は雪に埋もれている。住人のほとんどが逃げ出したいま、首都としての機能は皆無に等しく、かつてはゼテギネア一と謳われた優美な城も、まるで巨大な墓標のようだった。

「まさか、これほどひどいとは思わなんだ」

ケビンがため息とともにつぶやいた。

「これではバルハラの復興など望むべくもないではないか」

「むしろ好都合ではないのか？ このような状態でバルハラの復興を言い出す者はあるまい。逆におぬしの言っていた鎮魂の場としてなら、これほど雄弁に語る場所もない」

アラムートの城塞から一時的にケビンの小隊に加え

られたチェスター・モローがそう返す。

二人はバルハラに来てからというもの、フレドールも交えて毎晩のように、その鎮魂の場について話し合っていた。ケビンもチェスターも激しやすい性格の上、興奮するとフレドール一人では抑えきれないところだが、話題が同胞の弔いにまつわることであるだけに、話し合いは終始静かなものであった。

そしてその夜、フレドールがグランディーナに解放軍から抜きたいと申し出てきた。なぜかケビンとチェスターも一緒にだ。

「辞めるといふのはあなたたちも一緒にか？」

「いいえ、わたしだけです。解放軍の戦いも途上だというのに、彼らを辞めさせるわけにはいきません。ですが、わたし一人ならば、それほど影響はないだろうと判断しました」

「あなたの功績を考えると影響がないとは言えないがヨハンは承知しているのか？」

「彼らとも話し合った上です。皆のなかでわたしがいちばんの適任だろうということになったのです」

フレドールはヨハンと同じく旧ホーライ王国に仕えた文官だが、専門は建築だそうでアラムートの城塞の外壁を修復する工事の時にも指揮を執ったのだった。

「わかった。このままバルハラに残るのか？」

「そのつもりです。残った者を集めて下調べから始めようと思っています」

「私は手伝えないが、うまくいくといいな」

「ありがとうございます。こんなところで抜けるのは心苦しいのですが、ゼノビアのようにホーライも復興にとりかかりたいと思います。それにはまずバルハラから始めなくては。解放軍の武運をお祈りしております。そしていつか、皆様をバルハラにお招きしたいですね」

「あなたも元気で」

雪の降りしきるなか、フレドールと別れて一行はバルハラ城に向かった。名残惜しそうに彼がいつまでも手を振っていたのがランスロットには印象的だった。

雪が積もり放題で誰も片づける者がいないため、城は三階部分まで雪に埋まっている。城への出入りは正面、つまり南側の窓の一つを壊してなされており、そこが雪に埋まってしまうのも時間の問題と思われる。

入口にはバハムートを連れた帝国兵が待ちかまえていたが、マクレディールホルツェンドルフの放ったファイアウォールの魔法と、ランスロット、ケビン、チェ

スターの連係攻撃で倒し、それ以外の者が帝国兵と戦って、これを退けた。

「プロミオスも連れてくりや良かったのに」

「アンタリア大地で無理をさせた。ドラゴンにも休みは必要だ」

「あいつの出番なんて、次はハイランドまでねえだろう」

しかし、帝国兵が倒されるやユーシスが城の奥へ向かったのでカノープスのぼやきもそこまでだった。

彼女たちは一目山にミザールのいる部屋を目指した。あいにくと城の中では翼を広げられないので足で進むしかない。

ケビンとカリナの大隊が帝国兵の追撃に備えて入口に残ったので、ユーシスに従うのは天使たちとグランディーナたちだけだった。

やがて彼女たちが玉座の間に踏み込んだ時、そこに一人の天使が座しているのが見えた。だが彼女の周囲には驚くほど多くの羽根が見え、まるでそれらに埋もれているように見えた。

ロシユフォル教会に伝わる神話や着色硝子によれば、前の天使長ミザールは天使のなかでもっとも徳の高いやつで、六枚の翼を持つと言われていた。確かに

玉座の周囲に広がった羽根には悠に六枚分くらいの量がありそうだ。

しかし近づいてゆくユーシスの姿を認めてミザールが立ち上がると、その翼はさも重たそうに彼女の周囲に垂れ下がり、ところどころで羽根が抜けているのも目立った。

何より彼女の頭上には全ての天使、いままでユーシスが断罪してきた天使たちさえ持っていた光輪がないし、よく見れば羽根の色もユーシスたちのような純白ではなく、あらゆる色が混じって濁っていた。

それでもミザールは美しかった。その前ではユーシスもエインセルも比べものにならないと思えるほど美貌が際立っている。だがその分、やつれようも激しい。まるで何年も何十年も病んでいる人のように、激しい心労が彼女に大きな打撃を与えているのはつきりと見てとれるのだった。

「お気の毒に」

アイーシャがそうつぶやき、足を止めて手を組んだ。それでグランディーナやランスロット、カノープスも立ち止まった。いままで天使同士の戦いには立ち入らないできたのだ。念願の姉との再会を果たして、いままさらユーシスが介入を許すとは思えなかった。

アイーシャはそのまま膝をつき、頭を垂れる。

「しばらくぶりね、ユーシス。あなたが、来てくれる日を、待ち焦がれていたわ」

「だったら私が来た理由もわかつているわよね？

姉様、キャターズアイを返して。そして一緒に天界に帰りましょう。ファイラーハさまも許してくださいわ」

ミザールとは対照的にユーシスの翼は誇らしげに立ち、広げられていた。その光り輝く純白は何者にも染まることがなく、全ての色を拒絶しているかのようだ。

「キャターズアイは、もう、ないわ。天界から、持ち出して、すぐに、あの人に、渡してしまったから。」

それに、私は、もう、飛べない。天界に、戻ろうにも、翼が、動かせない。私を、連れて、帰ろうにも、あまりの、重たさに、あなたたちも、一緒に、墜ちてしまおうわ」

「そんなことない。私がお願すればファイラーハさまがおいになるはずよ。そうすればそんな肉体は棄てられる。偽りの翼から解放される。姉様が飛べなくなったはずがないわ」

「いいえ。墮天させられて、私は、肉体の、ある者に、変えられて、しまったの。この身体を、失えば、私は死ぬ、彼女たちの、ようにね」

ユーシスは弾かれたように振り返り、グランディーナを見た。しかしミザールが話し続けたので、すぐに向き直った。

「この翼は、私自身の、罪の、証、私が、犯した、罪の、重さ、この羽根、一枚、一枚が、私の、償わなければ、ならない、罪の、数。たとえ、私が、死んでも、全ての、羽根が、なくならないうちは、私の、罪は、許されない。生きていても、死んでいても、同じこと、私の、魂は、私の、罪に、縛りつけられている。だけど、ユーシス、あなたに、頼みたいことが、あるの。私を、殺して、この、肉体という、束縛から、私を、解き放つて」

「なぜ、そんなことを言うの、姉様？ 私にそんなことをできるはずがないのに。それに死んでしまえば、姉様の魂は煉獄に縛りつけられてしまうわ」

「あの人を、愛し、求められるがままに、与えたことが、私の、罪、この手が、覚えているの、あの人、温もりを、この身が、忘れられないの、あの人が、くれたものを、この目が、忘れられないの、あの人が、奪っていったものを」

「やめて！ 汚らわしい人間たちの愛を真似したと言うの？ もっとも尊いファイラーハさまの愛を受けて

いたのに、あんな人間を選ぶなんて！」

「でも、私は、幸せだった。あの人を、愛して、あの人に、愛されて、あの人、望みを、かなえて。それなのに、私は、どこで、間違ったのかしら？ 苦しくて、たまらないの、毎日、全身が、切り刻まれているかのように、苦しい、こうして、息を、しているだけで、息が、詰まって、しまいそう。あの人に、会いたい、あの人と、話が、したい、最後に、会ったのは、いつ？ 最後に、聞いた、言葉は、何？ それなのに、あの人、のことを、考えるだけで、胸が、苦しくなる、あの人に、愛された、身体中が、苦しくて、たまらない。心も、身体も、苦しいのなら、いつそ、この身体を、失くして、しまいたい。どうせ、生きていても、地獄なら、魂だけ、煉獄に、囚われた方が、どれだけ、楽かも、しれない、もっと、苦しいかも、しれない、今度は、死ぬことが、できないのだから、身体が、苦しめない分、心が、苦しむのかも、しれない、でも、あの人に、愛された、この身を、地上に、さらしておくぐらいなら、いつそ、私を、殺して、ユーシス」

そう言うのと、ミザールは妹の前にその身を投げ出した。彼女の言ったとおり、六枚の翼も重たげな音を立てた。天使はもとより有翼人さえ、彼女よりずっと軽

やかに動くだろう。

「ずるいわ、姉様。私がどんな思いでみんなの命を奪ってきたと思っているの？ 私の手にかかった方が同じ倒されるのでも少しでも早く天界に甦られるからと思つて、誰にも任せないできたのよ。かつて、これだけの天使が敵味方に分かれて戦つたことはなかつたわ。それも姉様があの男に祝福を与えたから、こんなことになつてしまつたのよ。あと何人の天使が地上に呼ばれたのかもわからないのに、姉様は苦しいというだけで自分は地上から逃れようというのね？」

するとミザールは顔を上げた。その眼差しには哀しみだけがあふれている。

「逃れられは、しないわ、私は。あなたの、苦しみも、あなたの、手で、倒された、天使たちの、痛みも、彼女たちに、殺された、天使たちの、苦しみも、全部、私の、身に、引き起こされるの、それが、私への、罰、その痛みだけが、私の罪を、許してくれる。その痛みを、感じるたびに、羽根、一枚が、失われる。たとえ、私が、殺されたと、しても、その苦しみから、逃れられることは、できないわ」

ユーシスも含めて天使たちは息を呑んだらしかつた。ミザールに蔑むような目を向けていたエインセルさえ、

予想もしていなかつた罰の重さに同情的な顔になる。

「そんな！ 私のしてきたことが姉様を苦しめていたなんて。なぜ、そう言つてくれなかつたの？」

「天使長として、あなたは、なすべきことを、しているだけ、私のことを、気にかける、必要など、ないわ。それに、私には、与えられる、罰よりも、辛いことが、あるからよ。あの人を、愛していた、あの人に、愛された、その、記憶の、方が、ずっと、酷く、私を、苛むの、私を、苦しめるの。あの人を、愛したことを、後悔している、はずがないのに、なぜ、こんなに、苦しいのか、わからないの。あの人に、会わなければ、良かったのかしら？ あの人に、言葉を、聞かなければ、良かったのかしら？ あの人に、願いを、叶えなければ、良かったのかしら？ わからないの、答えを、出せないの、あの人のことを、忘れられないのに、あの人を、覚えていることが、辛くて、たまらないのよ。これも、聖なる父の、与えた、罰なのかしら？ 聖なる父よりも、あの人を、愛してしまつたから？ 聖なる父を、裏切つたから？ でも、あの人を、忘れられない、あの人を、忘れたくない、あの人を、愛している、あの人に、愛されたい。父よ、どうか、その記憶だけは、取り上げないで！」

「命を奪われるほどの痛みより、あの男への思いの方が苦しいと言うの？」

「それが、私の、選んだことだから。ああ、でも、あの時、あの人たちの、声に、応えなければ、私は、天使長で、いられたかしら？　こんなに、大勢の、仲間を、巻き込むことも、なく、天界も、平和だったかしら？　何も、知らず、聖なる父に、守られて、平穏なままで、いられたかしら？　いいえ、私は、こんなことに、なるまで、生きる、ということが、わからない、ままだったわ。人を、見守り、祝福を、与える、天使長で、ありながら、私は、ずっと、人が、喜び、悲しみ、笑い、怒り、憎み、愛する、理由が、わからなかった。あの人に、愛された時に、初めて、生命というものが、わかったの、生きてると、いうことを、初めて、理解したのよ。天界に、いるうちは、ずっと、知らないままだったわ、知らないままで、人に、祝福を、与えたことを、いまでは、恐ろしいとさえ、思う、自分の、無知が、恥ずかしい、人のことを、何も、知らないままで、満足していたなんて、おこがましさに、身が、震えてしまう」

「私たちは天使、ファイラーハさまの僕しもべだわ、そんなこと知る必要もないじゃない！」

「だから、私は、天使で、いられなくなったのよ。でも、いまは、その記憶が、私を、苦しめる、私が、生きた、証は、全て、私の、手から、奪い去られてしまった、あの人の、愛さえも、どこにも、残っていない。そのことが、辛い、そのことが、苦しい、私に、生きることが、喜びを、与えてくれた、人が、私から、全てを、奪ってしまった。生きていたから、苦しいの、この苦しみから、私を、助けて、ユース」

ミザールが身を起こし、妹の足下にすがりつく。彼女は話していてもたびたび言葉が途切れ、息をするのも辛そうだった。けれどもユースには、そんな姉の状況などまったく理解できないらしく、それは三人の天使たちも同じようだった。

「与えられた喜びなど本当の生きた証にはならない。あなたは自分でそれを見つけ出すべきだ」

天使たちが一斉にグランディーナを振り返る。しかし彼女は意に介さず、ミザールだけを見て話し続けた。

「もはや、あなたに利用価値がなくなつたからラシュデイはあなたのもとを去っていったのだろう。ならば、あなたを生かしておいても私たちの脅威にはなるまい」

「私に、生きると、言うの？」

「あなたが本当に生きることを知りたいと思うのなら、このまま見逃すのも吝かではないと言っている」

ミザールはよろめきながらも立ち上がった。

「私たちは天使に襲われはしたが、大した被害は受けていない。あなた一人を見逃したところでこの先、影響はあるまい」

ミザールは思わぬ言葉に驚愕していたが、ユーシスたちも同じだ。もつともランスロットやカノープスだつて、彼女がこんなことを言い出すなんて思つてもいなかったのだから、驚いたことと言つたら同じようなものだ。

「ファイラーハの僕でありながら、ラシユデイのために裏切つたのだろう。ならばいつそ、そのまま抗い続けてみたらどうだ？」

「駄目よ、そんなことが、許されるわけがない。私は、人間ではない、天使だつたの、だもの、聖なる父の、名誉の、ためにも、私は、いては、ならない、存在しては、ならない。私は、罰を、受けなければ、ならない。これ以上、聖なる父の、名誉を、汚させては、ならない。私の、存在そのものが、穢れなのだから、この、穢れは、浄められなければ、ならない。」

そうでしょう、ユーシス？ 私を、倒して、聖なる

父の、名誉を、取り戻しなさい！」

彼女はそう言うと、両手を広げて立つた。重たい翼がわずかに動いたが、それはもうミザールには罰と足枷ぐらいの意味しかないようで、そうして立つていることさえも苦しげだった。

ユーシスは城に踏み込んで初めて十字架をかまえた姉の苦しみをこれ以上、引き延ばすのが耐えられなかったのだろうか。天使長としてミザールの穢れを浄めなければと考えたのだろうか。

「誓約によりて我らが敵に神の裁きを与えん！ 消滅せよ、バニッシュユ！」

全ては一瞬で終わった。ミザールはすぐに倒れ、ユーシスが駆け寄る。前の天使長の口にした苦しみが、その命を死の一步手前まで追い込んでいたのかもしれないほど、呆気ない最期であつた。

「姉様！」

「彼を、止めて、ユーシス。これ、以上、彼、に、罪を、犯さ、せないで。彼が、何、を企ん、でい、るのか、はわか、らない、けど、この、まま、では、天、界、も大、変、なこ、とに、なつて、しま、うわ。」

ああ、ラシユ、デイ、それで、もあ、なたを、愛、して、いた、のよ」

「ミザール姉様!!」

ユーシスの悲鳴とともにミザールの姿は砂のように崩れた。後にはただ、彼女の翼から抜け落ちた無数の羽根が散乱しているばかりであった。

こうしてバルハラは陥落した。これにてゼテギネア大陸の東側は解放され、人びとはその知らせに各地で沸いた。

そのままアラムートの城塞に帰還した一行は、天空の三騎士らがすでに暗黒のガルフを打ち倒したことを知った。

エインセルら三人の天使たちは天界に戻ることになったが、ただ一人、ユーシスだけは地上に残ると言い、天空の三騎士もそれを了解した。

解放軍は四ヶ月ばかり慣れ親しんだアラムートの城塞に別れを告げて、帝都ゼテギネアを目指すこととなるのだが、その前に時間を少し戻して、アンタンジルの顛末について語るとしよう。

バーミヤンで解放軍の本隊と別れたサラデインとユーリア、天空の三騎士はカオスゲートのある島までとって返し、翌日にはアンタンジルに至った。

当初の予定どおり、ユーリアとグリフォンは島で待機し、サラデインだけが天空の三騎士に同行した。

事前に説明されていたが、アンタンジルに一步踏み込んだ途端、サラデインは魔界の瘴気のために息をするのも難しいことを知った。その対抗策を採っていても息苦しく、水や大地ばかりか空気さえも悪意を持っているかのようなのだ。

「ムバンダカに寄つてから行こう」

「そうですネ」

それからフォーゲルは振り返り、サラデインに説明する。

「アンタンジルでは唯一、まともと言っていい町だ。何千年も封印され、魔界の瘴気にさらされて、どのようになつたのか調べておかなければな」

「私たちが行けば、わかりましょう。このように身を隠しても見破られるようならば、ムバンダカは完全に魔界の一部となつたということです」

フェンリルの言うとおり、四人は頭からかぶる外套を着込み、手袋もはめて、一目見たぐらいでは何者かもわからなくなつていた。

ただ、アンタンジルの気候はアンタリア大地に近いらしく、不快な蒸し暑さが耐えがたいくらいだった。

「そうなれば、たとえ封印の内とはいえ、地上にそのような場所を残すわけにはいくまい。ムバンダカは殲滅する」

「相変わらず容赦がありませんネエ、フォーゲルさんは」

「その口をふさがれたいのか？ 魔界で名を呼ぶことは我らの名をそこら中に大音声でふれ回るようなもの、神の尖兵が来たと報せる行為に等しい。気をつけろ、我らはアンタンジルには好ましからざる客だ」

「魔界に来たのが久しぶりだったので忘れていました。ですが、魔界の戦力を少しでも削いでおくのは悪いことではないでしょう？」

「アンタンジル中の悪魔を倒しても魔界の戦力をそれほど削いだことにはなるまい。奴らの本拠地は魔界だ、アンタンジルに出てきた者など大した数ではなからう」

「いくらわたしたちでもアンタンジル中の悪魔を倒すのは大変ですネ。これから気をつけますヨ」

「もう遅いわ。見張りの兵かもしれないけれど見つかつてしまったわよ」

フェンリルの言ったとおり、悪魔が五匹、近づいてくる。

見上げた空は灰色で雲も澱んでいるかのようだ。風はなく、空気も停滞していた。それでもアンタンジルには陽の光がまったく届かないというわけではないらしかった。

「やつぱり、わたしの責任でしょうネ。すぐに片づけてしまえますヨ」

そう言ったスルストの背に炎の翼が生えた。彼はそのまま剣を抜くと、言ったとおり、五匹のデーモンを素早く倒した。

「さあ、ムバンダカに行きましようカ？」

「そうしよう」

フォーゲルが先頭に立ち、スルストが続く。サラディンはフェンリルに促されて彼女の前を歩き、前後を天空の三騎士に守られることになった。

以後、アンタンジルを出るまでの三日間、それが彼の定位置だった。

足下の大地は沼沢地と呼ぶほどではなかったが、ところどころに水たまりがあり、歩きづらい泥地だった。サラディンはいつもの引っかけ靴ではなく、フォーゲルの助言に従って騎士たちの履くような頑丈な革靴を履いていたが、それでも歩いているうちに水がしみこんでくる。

だが、じきに彼らはムバンダカに至った。街壁もなく、通りという通りは泥に覆われたままなところは町と言うよりも村と呼んだ方が相応しい。そこに住んでいるのがどんな人間なのか、サラデインには予想もつかなかった。

真つ先に視界に入ったのは、短い角を生やした人型の集団だった。人のように鎧を身につけて武器を持っていたが、丸い頭にはざんばら髪しか生えておらず、額の真ん中の角が目立った。

彼らは喧嘩をしており、二手に分かれて争っているようだったが、道を行く者はそれを気にする様子もなかった。むしろ、その集団から抜け出して去っていく者もあれば、新たにどちらかの集団に混じる者もあり、喧嘩と見えるのも、ここでただの話し合いだったりするのかもしれない。

そして、道を行く者も似たような容姿が多く、改めてサラデインは、ここが魔界だと言った天空の三騎士の言葉に納得していた。

時々、通行人に有翼人がいたが、その羽根が真つ黒だったり、悪魔のような翼の者がいることも稀ではなかった。

たまにそれらの有翼人よりも背が高い灰色の肌をした者がいたが、その顔つきは一本角よりも凶暴そうで、手が長くて前屈みの姿勢で歩いており、見た目どおりに刃り構わず暴力を振るっているのだった。

「オウガですかね？」

「違うようだ。この人間が長い歳月の間に変化したものだろう。本物ならば俺たちに気づくはずだ」

けれど、オウガもどき以上にサラデインを驚かせたのは長衣を着た魔法使いらしい人間の存在だった。ただ、それらの顔はどれも土気色で、これ以上ないぐらいに肉が薄かった。まるで頭蓋骨の上に直接、皮を貼りつけたかのような顔つきだ。

彼らは魔法使いだった。それも足下が泥にまみれるのを嫌って、自分たちの身体を宙に浮かせて移動し、その力を誇示していたし、サラデインにも彼らの魔力は伝わってきた。

オウガもどきさえ彼らを避けた。

そして彼らはフォーゲルの前で立ち止まり、肉の薄い鼻をひくつかせた。

「臭う、臭うぞ。わしらの大嫌いな太陽神の臭いがする」

「それもそのはず、こいつらは外の世界から来た連

中だ。あの忌々しい封印を破ってきたか？ 外に行けるようになったのか？」

その声はよくとおり、オウガもどぎや有翼人、一本角がだんだん集まってきた。こうして見ると人間の姿は皆無と言つてよく、魔法使いたちも人間ではないのかもしれない。

「いや、封印はされたまま、太陽神がわしらを閉じ込めたままだ」

「では、こいつらはどうやって来た？ このアンタンジルに何をしに来た？」

「もちろん、わしらに害をなすために決まっている。太陽神とわしらは不倶戴天の敵同士、ましてやここは魔界につながっている。ここには暗黒のガルフさまが封印されている」

「ならば、望みどおりにしてやろう！」

目にも止まらぬ速さでフォーゲルは剣を抜き、手近の何人かを斬り捨てた。

と同時に頭の被り物が落ちて、彼の竜頭があらわになった。

「こ、こいつらは?!」

「天空の三騎士だ！」

ムバンダカは騒然となり、スルストやフェンリルも

剣を抜いて応戦する。

しかし、サラデインは速攻で身を隠した。アンタンジルの空気が思っていた以上に彼の負担となっており、このままでは天空の三騎士の足を引っ張りかねないと判断したからだ。

けれど、彼などいなくても三人の強さは圧倒的だった。彼らの剣が一閃するたびに首が一つ飛んだ。どれも巨大な剣ではないのに二つまとめて飛ぶこともあった。飛ばない時には少なくとも一体が串刺しにされていた。

ファイラーハの守りも働いており、三人が傷を負ってもすぐに癒された。天空の三騎士の戦いは一方的なものだった。

その光景はオウガバトルもかくありなんと思わせるほどに凄惨なもので、次から次へと現れるオウガもどぎや悪魔、一本角に有翼人の誰もが彼らにはかなわなかった。天空の三騎士の攻撃は、まるで死体の山を築く作業のようだ。

それはサラデインに吐き気を催させた。確かにフォーゲルはムバンダカの殲滅を口にしたが、その徹底ぶりは戦慄するのに十分なほどだ。スルストやフェンリルも動く者には例外なく、その剣を向け、斬った。

子どものような一本角や有翼人もいたが、彼らも生存は許されなかった。

何千年前もそうしたように、天空の三騎士は魔界の者たちを狩った。

「ここまでするのが神の意志だということのか？」

「そうだ」

フォーゲルの竜頭は、自らの赤い血と悪魔たちの黒っぽい体液のために三色斑になっていた。

「このような者たちが神に帰依することはもはやない。その力はそのまま魔界の神々の力となり、いずれ地上や天界を脅かすだろう。ムバンダカはそのような者たちの拠点として働いていた。来るべきオウガバトルに備えて、神はそうした場所を減らすことを望まれている。我ら三人がその意志に背くことはできない。そのため力であり、そのため命だ」

「だがムバンダカで何があつたかは広く知られよう。知った者はますます太陽神を憎み、そのことを自分たちの力とするのではないのか？」

「逆の立場でも同じことだ。魔界の神々が我々のような尖兵を送り込めば、必ず地上の者を皆殺しにしようとするだろう。どこにあつても、共存など、あり得ないのだ」

「何にしても長居は無用ですネ。アンタンジルの水には女神の力が働いていませんが、わたしたち、身支度をしてるので待つててください」

「承知した」

血にまみれていたのはフォーゲルばかりではなかった。スルストやフェンリルも鎧が汚れたり、傷を負ったりしていた。しかし、そんな傷はすぐにファイラーハに癒されるのだろう。

サラデインは倒された者たちの様子を見てまわつた。たいがいのは者は一撃でとどめを刺されており、天空の三騎士の手際の良さがうかがえる。

だが、オウガもどきと呼んだ灰色の肌の者たちは旺盛な生命力を持つていたらしく、一撃では倒しきれなかったようだ。

これが偽物だと言うのならば、伝説に伝わるオウガとは一騎当千の強者であつたに違いない。そんな者が地上を蹂躪した時の怖ろしさも容易に想像がついた。

それでもサラデインはファイラーハの命だからと彼らを殺し、一つの町を失くしてしまつた天空の三騎士に諸手を挙げて賛成することができないのだ。

それが神というものなのだろう。神の尖兵とフォーゲルが言ったのは皮肉も込めてのことなのかもしれない

い。その過酷さがなければ人間はオウガバトルの時に滅んでいた。それもまた紛れもない事実であつたろう。三騎士が順に戻つてきて、彼らはガルフを封印した地向かった。いまも使われている細い道が、湿地の間をぬうように西へ延びていた。

四人が足を止めたのは天空の三騎士がイノongoと呼ぶ廃墟でだ。フォーゲルの話によれば、そこはオウガバトルの時に滅ぼされた町なのだという。

「奴を追つてアンタンジルに攻め込んだ我々は、このイノongoで奴の軍とぶつかった。すでにオウガバトルの趨勢は決しており、奴は最後まで抵抗していた勢力だったが、その影響力を重く見た神は、アンタンジルの封印と少なくとも奴を封印するか、できたら倒すことを命じたのだ」

「確かに地上にも彼の名は伝わっている。最も長く戦つた魔界の将軍として」

「魔界に天界や地上と同様の組織があるわけではなく、奴の率いる勢力は大きく、将軍と呼ぶのが相応しかつたらう。だが我々には勢いもあつた。地上から魔界の子どもを追出し、平定してきたばかりだ。奴の配下のオウガやサタンがいくら手強くても、それを

退けるだけの力があつたのだ」

「でも、わたしたちには奴を倒すだけの余力はありませんでしたネ。わたしたちもここで三人だけになつてしまいましたし、生き残つていた人たちもかなり倒されてしまいました。人間は本当にぎりぎりのところで勝つたんですヨ」

「今度は彼を倒すために？」

「そのつもりです。ただ奴も私たちと一緒に本当に死ぬということはありません。ですが、ここで倒されれば、復活にはかなりの時間を要します。来るべきオウガバトルには、奴がオウガを率いることはないでしょう」

「あなた方がアンタンジルに来ているように魔界の尖兵や神々がカオスゲートを破ることはないのか？」

「それは奴らにとつて分のいい賭けではないな。カオスゲートを封じたのは太陽神、彼のように破ることのできる者がいても、その封印自体が消えるわけではないのだ。カオスゲートを破るにも膨大な魔力が要るだろう。さらに地上なり天界に橋頭堡を作るのも楽ではないはず、そんなことをするよりも奴らはカオスゲートを消す方を選ぶに違いない。だが、それは遙かに大変なことで、準備にも時間がかかるだろう」

「わたしたちがアンタンジルに來られるのは魔界化しているとはいえ、地上の一部だからです。魔界に攻め込むとはわけが違いますネ。そこは奴らの世界ですから、わたしたちもこんなのにんびりしていられません」

「それでは一つうかがおう。天界や地上から魔界に攻め込むことも、その逆も難しいとあなた方は言う。それは世界の分断を意味するのではないのか？ それなのに、なぜオウガバトルが再び起こると判断しているのだ？ そう考える根拠を聞かせてもらいたい」

「人、特に人間のためです。人間は光と闇を併せ持つ存在、その本質は確かに光に惹かれるものですが、彼のように闇に惹かれる者も少なからずおり、その力は有翼人や人魚の比ではありません。それは魔界の知るところとなり、人の内に擬似カオスゲートを生み出します。そのような人間が増えれば、たとえカオスゲートは閉ざされたままでも魔界の者は容易に地上に出、また天界にも向かうでしょう。私たちが彼のことを重視しているのは、すでに擬似カオスゲートを持っているのではないかと考えているからです。一度持つてしまえば、もはや魔界との繋がりを絶つことはできません」

「擬似カオスゲート？」

「そんなことまで話さなくても良かったんじゃないですか？」

「いや、その可能性のある者は知っておくべきだろう。なぜ悪魔が人の召喚に応じると思う？ 召喚した者はそれだけ魔界に近くなるからだ。やがて、その者は魔界と分かちがたくなつていき、その内に魔界との通路を持つてしまう。それが擬似カオスゲートだ。持ち主の力にもよるが、魔界からの出入りが可能になる。ただ同時に魔界の瘴気に冒されることにもなり、長くは保たない。しかし、そうする者が人、特に人間のあいだに絶えることはあるまい。だから悪魔たちは地上に來ることができる」

「あの方のなかに、そのようなものがあると疑っているのか？」

「そうです。でも彼にはまだ自分の意志がありますネ。擬似カオスゲートが生じてしまうと、ほとんどの人は魔界の傀儡くわいとなり、魔界と地上を結ぶ道具になつてしまうのです。でも彼はそうではありません。それは驚くべきことです。そうならないためにはとても強い意志がいるんですヨ。そうなっている者はわたしたちも彼のほかに一人しか知りません」

「その一人とは、裏切りの使徒のことか？」

サラディンの問いに三人は顔を見合わせる。応じたのはフォーゲルだ。

「そうだ。そのためもあって彼の力はキャターズアインに封印された」

「力を失えば彼に擬似カオスゲートを律することはできなくなってしまうのではないか？」

「そんなことはない。擬似カオスゲートを維持するには強い力を必要とする。力を失って、彼の擬似カオスゲートも維持できなくなったのだ。魔界は彼の力を利用できなくなり、擬似カオスゲートも使われなくなった」

「だが彼とて、たかが人であろう。あなた方の力をもつてすれば命を取ることまたやすかつたのではないのか？」

「使徒の力はわたしたちと同じくらいです。彼を簡単に負かせたのは神々だけでしょウ。前に話しましたね、彼のために地上を助けるのが遅れたト？ つまり、そういうことなんですヨ」

「あなたは彼女のことを心配しているではありませんか？」

「それは否定しない。だが、あれには魔力がない。

擬似カオスゲートを作ることはできなからう」

「俺は力と言っただろう。彼女が堕ちれば、魔力があろうとなかろうと関係ない。むしろ、あれだけの力を魔界が見逃すはずもない。だから我らは彼女が堕ちることを案じているのだ。おぬしから説得すれば、彼女も我々の提案を受け入れてくれるのではないか？」

「それはできない。あれと同じように、わたしも最後まで諦めるわけにはいかないのだ」

「そうなる可能性は低くないし、そうなつてからでは遅いということもわかっているのか？」

「あれが決めたことだ。いまさら、わたしが口を挟む筋合いではない」

フォーゲルはスラストとフェンリルを振り返つたが、二人とも肩をすくめるばかりだった。

「休む前にもう一つだけ聞きたい。擬似カオスゲートとは人の魂に宿るのか？ それとも身体に？」

「全てにです。そうなつたら逃れることはできません。その者は魔界に侵蝕されているからです」

「ならば、あの方が転生しても、それから逃れることはできないということか？」

「恐らくはな。だが、そのような前例はない。転生は外道の技だ」

「彼がいつまでも転生しないのも、そうとわかって
いるからじゃないですか？ できるのなら、さつさと
転生すればいいのですヨ」

「器がなければ、あの方とて転生するわけにはいく
まい。おそらく、いま転生するのは都合が悪いのだ」

「器とはいやな言い方ですネ」

サラデインはゆつくりと立ち上がった。

「そろそろ休ませてもらう」

「そうするがいい。明日は奴の封印されたところま
で行くつもりだ。きつい行程になるかもしれないし、
そもそも、よく寝られるという保証もないからな」

フォーゲルの言ったとおり、彼の眠りは浅く短かつ
た。切れ切れのまどろみの中でも悪夢を見たからだ。
それなのに目が覚めるとどんな内容だったのか、まる
で思い出せなかった。目を覚ますとただひどく汗をか
いていて、とても恐ろしかったことしか覚えていない
のだ。

そのために朝だとフェンリルに起こされた時にも
ちつとも休んだような気がしなかった。魔界の瘴気
のため、全身が蝕まれたように感じることも一役買っ
ていただろう。

「大丈夫ですか？ ひどく疲れているようですが」

「大して眠れなかったのだ。あなた方の言うように、
魔界はただいるだけでも楽ではないところだ」

「私たちのように神の加護が得られれば良いのです
が私たちが受けられるのは私たち自身だけで、ほかの
方には広げられないのです」

「かといって、あまり強い魔法は使わぬ方が良いの
だろう？ 魔界の者は魔法に敏感だと聞いた」

「そうですね。でも私たちの存在がここでは闇の中
の松明のようなものです。あなたが自分の身を守る魔
法を使ったところで、襲ってくる者が極端に増えるこ
ともないでしょう。私たちのことは気にかげず、自分
の身を守ってください」

「そうさせてもらおう」

「あなたの支度ができたら出発します。声をかけて
ください」

「ありがとう」

それから彼らは襲ってくる魔界の者たちを退けなが
ら西へ向かった。悪魔も一本角も、ガルフのもとに向
かう三騎士を単に足止めする役割さえ果たしていな
かった。

彼らが暗黒のガルフを封印したアンタンジルに着いたのはその日の午後だ。

そこには石造りの、神殿と呼んでも差し支えない立派な建物があり、ガルフや魔界の神々に捧げたらしい生贄の血生臭いにおいが充満していた。

そして、神殿の中からは吐き気を覚えるほどの悪意が放たれて、サラデインはたまらず足を止めた。

フェンリルも顔をしかめたが、彼を追い越していき、三人は神殿に近づいた。

「来たか、天空の三騎士ども！ 我が身を封じ、我が部下を倒した太陽神の手先どもめ、貴様らを倒す日をいまかいまかと待ち焦がれていたぞ！」

ガルフの声は周辺の空気を軋ませた。地上に現れた魔界となるほど変容したアンタンジルの大気さえ、かつての魔界の將軍になじむには至らないのだ。それが魔界の神々ならば、大気は悲鳴を上げるかもしれない。

「我ら三人に封じられた身で何をほざく！ 封印の下で命と力を削られ、なおここにあるしぶときは認めてやる。だがその命、その姿も今日までのものと思うがいい！」

「くくくつ、これだから貴様らはおめでたいと言うのだ。この俺が貴様らごときの封印で命と力を削られ

ただと?! その逆よ、あの時は俺たちの方が追い詰められていた。太陽神の手先が急に増えたものでな、形勢が逆転した。だから俺は貴様らに封印されたのだ。幾千年が経ち、力をつけるためにな。貴様らの方こそ、今日までの命と覚悟しろ！ 天空の三騎士ならば俺の復活に捧げるに相応しい生贄だ!!」

「馬鹿ナ！」

ガルフの言葉が終わると同時に神殿は爆発し、跡形もなく吹き飛んだ。

無数の瓦礫が降り注ぎ、四人を打つ。サラデインは天空の三騎士とともに素早く上空に逃れたが、無傷ではいられなかった。

神殿の跡に立っていたのは彼らの数倍の大きさの悪魔、サタンだった。

「私たちの封印で命と力を削られたはず、あれでは以前より大きいわ！」

「生贄と信者が奴に力を与えたんですか？ いくら四〇〇〇年も経っているとはいえ、そんなはずがありません。それとも魔界から力を得ているとカ？」

ガルフの手には塔のような高さの巨大な鎌があった。それに比べれば、いくら天空の三騎士の手にあるとはいえ、剣も短刀にしか見えないほどだ。

「さあ、下りてこい、天空の三騎士ども！　そこな人間ともども葬り、俺の復活に捧げてやろう！」

「確かに奴の力は前に戦った時と同じくらいには復活しているようだ。だが奴はまだ封印の支配下にある。あれだけの力を持つのなら、なぜ、そこから動き出さない？　魔界に戻るなり地上を目指すなりしないのは奴にそうできないからだ」

「でも、あんな力はいつたいどこから得ているんです？　あれに配下を呼ばれたら、いくらわたしたちだつて大変ですよ」

「ならば、奴をさっさと片づけるとしようか。せめて封印が働いているうちにな！」

三騎士は地上に下り、ガルフと対峙した。その対比はまるでジャイアントと子どものようだ。

「確かに貴様の言うように俺はまだ封印から解放されておらん。だが、いまの俺の力をもつてすれば封印などあつても貴様らと戦うに支障はないわ！」

「寝言は我らを倒してからほざけ！」
ガルフの振り下ろした巨大な鎌をフォーゲルが剣で受ける。

彼は返す刃で斬り込んだが、鎌の大きさは楯としても働いた。

「大口をたたくな、天空の三騎士め！　おまえ一人では物足りん、三人まとめてかかってくるがいい、その人間も一緒にな！」

そう言つてサタンは巨大な翼を動かしたが、その身はわずかにも浮き上がりはしなかった。

「くそつ、大地の神か！　だが飛べずとも何の不自由もないわ！」

「呪文を唱える気だわ！」

「そうはさせませんヨ！」

スルストが素早くガルフの背後に回り込み、フェンリルも二人と間を空けた。

三人は三方からサタンを囲む形になり、フォーゲルとスルストが同時に攻めた。

だが、ガルフが手元で鎌を一回転させると巨大な岩石が一带に降り注いだ。

しかし、その寸前でサラデインも含めて水の幕が四人を被い、落下の衝撃を吸収した。

次いで渦巻く炎がガルフに襲いかかり、スルスト自身とフォーゲルの攻撃も合わせて三方からサタンを攻めた。

巨体のためか、ガルフはほとんど避けなかった。だが、いくら斬りつけられても、その打撃などまる

で気にしていないようで攻撃に専念している。

フェンリルが水を針に替えて攻めても、悪魔は端から守る気はないようだ。

しかし、三騎士が受ける太陽神の加護はサタンの攻撃を次々に癒していく。

ガルフの大鎌は一度ならず三騎士の首を飛ばし、数えていられないほど手足を断った。スルストなどはその身を縦に真つ二つにさえされた。

悪魔の鎌は鋭く、いくら三騎士が鎧で守られていようと、紙のように切り裂いてしまうからだ。

けれど、ファイラーハの守る三人の身体は、そうした傷を即座に治し、すぐに戦線に引き戻した。

そのような加護があつても天空の騎士たちは魔界の攻撃に次々に倒されたのだ。その苛烈さにサラデインは戦慄せずにいられなかった。オウガバトルとはそのような戦いであつたのだと、これ以上、明確に語るものもなかった。

とうとうガルフは片膝を落とした。

無数の傷が悪魔をより黒く染めていた。

「畜生！ こんな石に頼った俺が馬鹿だったのだ！」

「それは、キャターズアイ！」

サラデインはサタンの投げた石を素早く拾ったが、それはただの寶石となっていた。その石を手によれば、オウガバトルを再び起こせると言われたはずの力は微塵も感じられなかった。

「その力、キャターズアイのためだったのか！」

「ふん！ こんな石にもう用はない！ 俺は俺自身の力を取り戻して、いつか貴様らに復讐してやる！」

ガルフはもう片方の膝もついた。

大鎌はフォーゲルに柄を切り刻まれて、武器としては使い物にならなくなっていた。

その拳も片方は業火に焼かれ、片方は氷の塊に打ち砕かれた。

翼の羽ばたきも三騎士を激しく打つたが、フォーゲルとスルストが片方ずつ切り裂いていた。

「いくらおまえでも命を取られれば、そのようなことは言えまい。次におまえが力を取り戻すのは、また四〇〇〇年後のことだ！」

「くくくつ、その時まで貴様らが存在していられるかな？ 小うるさい太陽神の封印などなくば、魔界が我が養分、四〇〇〇年もかからぬと思え、俺はまた復活してやる!!」

「その時はまた、おまえの命を奪うまでだ！」

ガルフの四肢が斬られ、胴体は真つ二つにされた。

それでも悪魔は息絶えず、ファイラーハや天空の三騎士への呪詛を唱え続けた。

首を落とされてもその声は止まず、結局、三騎士はガルフを細切れにしてようやく止めたのだった。

ガルフの神殿跡で一行は休んだ。魔界の將軍との激しい戦いは、さすがの天空の三騎士にも休みを必要としたのだ。

また三人の関心はガルフが捨てたキャターズアイにも向けられた。

「確かに、この石には何の力もありません。奴が使つてしまつて、あんなに強くなつたんですか？」

「俺にもわからん。何しろ、キャターズアイは見たこともなかったのだからな。だが、天界であれほど警戒されていた石が奴にあんな力を与えるだけだったとは思えん」

「彼が使つたのでしよう。ほかには考えられません。奴の力があれだけで済んだのは、そのためでしょう」

「わたしもそう思う」

「彼がキャターズアイの力を手に入れたと？ 神の

封印だぞ、人間が容易に解けるはずがない！」

「その神がなしたカオスゲートを、あの方は破つている。おかしくはないだろう」

「残念だが、カオスゲートとキャターズアイでは神の込めた力が違う。カオスゲートはいずれ魔界の神々が総力を込めれば破られるもの、だがキャターズアイの力を解放することは許されない」

「でも、このように力を失っているのですよ？」

「待つてください、皆さん。見たこともない物を前に議論しても時間の無駄です。これが本物のキャターズアイかどうかなんて神様に訊けば、わかるじゃないですか」

「それもそうだな」

フォーゲルはただちに石を驚づかみにし、目をつぶった。

三人とも疲労の色が濃いのに、仕事熱心なことだとサラディンは感心していた。

竜頭の騎士が目を開け、手を開くと、石は半バス(約一五センチメートル)ほど浮かんで消えた。

「キャターズアイに間違いないようだ」

「神様はなぜ取り上げてしまつたんですか？」

「理由は言わなかったが預かると言われたのだ」

「でしたら、この件はわたしたちの手を離れたものと考えていいんですネ。さっさと休んで帰りましょう、いくら神の守りがあるとは言っても、アンタンジルにいるのは気持ちのいいものじゃありませんからネ」

「そうだな。見張りには俺が立とう。三人は休んでくれ」

そう言つてフォーゲルが立ち上がりかけるのをサラディンは止めた。

「わたしはあなた方ほど疲れていない。あなた方は休んでほしい。せめて、わたしにできることだ」

「だが悪魔やオウガもどきが襲つてくるぞ？」

「戦いの心得がないわけではない。手に負えない時にはあなた方を起こす」

「本当に大丈夫ですか？」

彼は微笑んだ。

「無理はしない」

それから、三人の返事を待たずにサラディンは神殿の縁に立つていった。

だが、実際に彼の心を占めていたのは師の取った行動だった。いくつもの考えられる可能性が浮かび、一つずつ否定する。

けれど、やはりラシュデイの目的は見えず、結論は

出ないままだ。

（だが、キャターズアイから力を得て、あなたは何をするといいのだ？ あなたの力はすでにそんな物を必要としないほど大きかったはず、何のためにそれだけの力を得る？）

野営地の周囲に防御のための魔法を仕掛けながら、サラディンの思いは師ラシュデイに向かつていった。

それは暗黒のガルフがもたらさず闇よりも、なお濃いものであった。